アトラスⅢ

鳥が消えた島

青いアトラス

正道

目次

第4章　鳥が消えた島

（1）来訪者　……3
（2）圧力の過程　……11
（3）太陽と月の詩　……20
（4）沈黙の春　……28
（5）希望の帰還　……34

第5章　青いアトラス

（1）夜明け　……47
（2）掌上の垂訓　……52
（3）新しい日を迎えて　……59
（4）混乱　……65
（5）まぶたの中の出会い　……73

第４章　鳥が消えた島

（１）来訪者

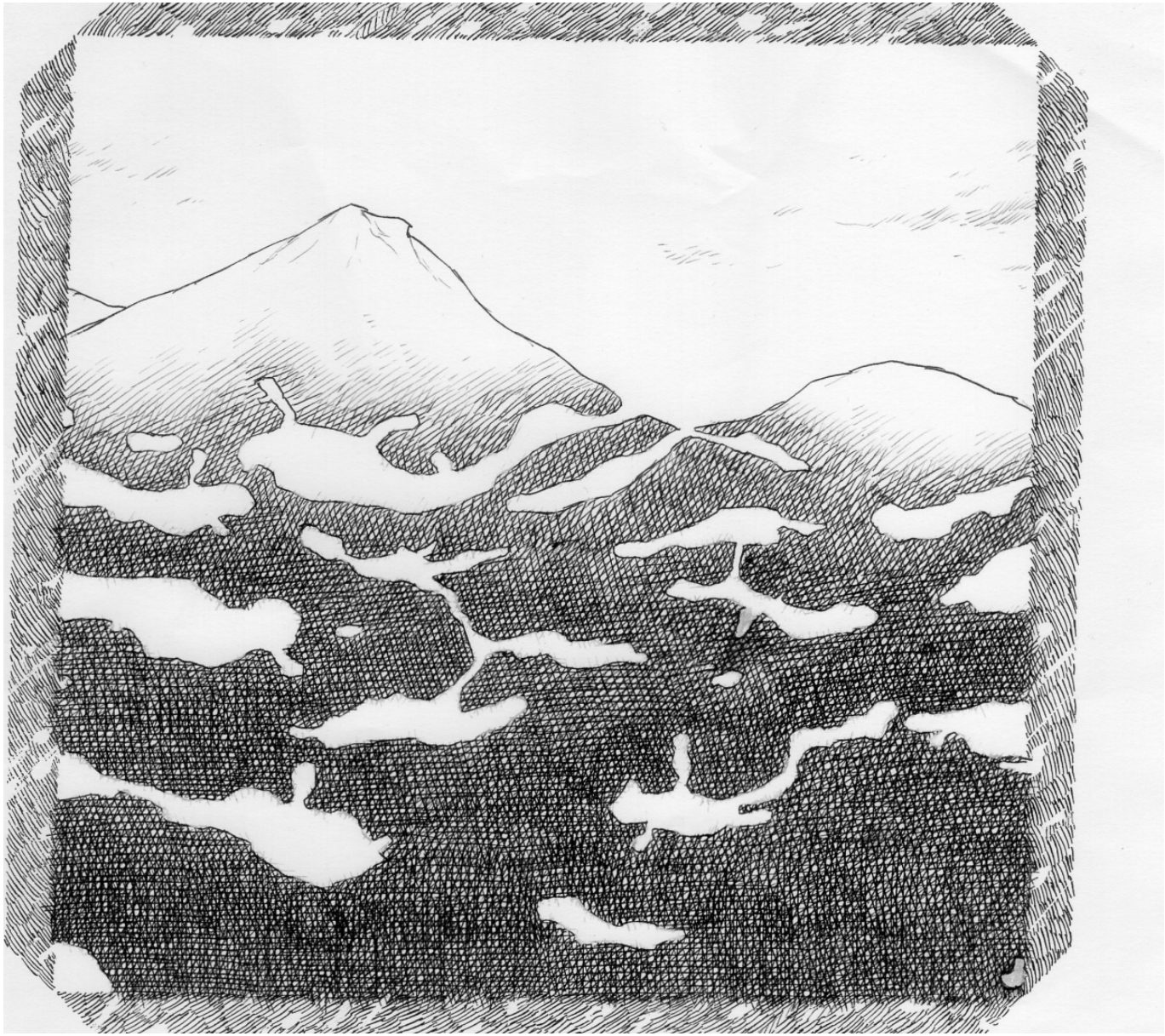
「彼らさえ見つかっていれば……」
と、チェリアがひたすらにその発見を願い、しかし結局それが叶わなかった、老婆キンナラ、異国人の少年、ならびにデルフィー中毒者たちは、今も人目から逃れるようにして怪しげな共同生活を営んでいました。
キンナラたちと寝食を共にしている男たちの数は、約百二十人。
キンナラから招集をうけて海岸の店に集まった者たちは、当時およそ三百人あまりもいましたが、老婆のもとで移動生活を続けていくうち、その面倒な引っ越しに嫌気がさして、大部分の者たちが共同体から脱落していったのです。なにしろキンナラは、たった一月の間に、三回も住居を変えることを強要したのですから。キンナラいわく、
「そうでもしないと、巫女たちに見つかっちまうんだよ」
ということでしたが、はやり面倒は面倒だったのでしょう。

そうして脱落者たちは、もともと自分たちが住んでいた村へと帰ったのですが、しかし、そこで大人しくなったと思いきや、
「キンナラさまのもとを離れたのは失敗だった。デルフィーを飲めないことが、ここまで苦しいことだったなんて。頭が痛い。イライラする。家族が煩わしい」
と言って、死ぬほどの後悔を抱きながら、家族や周囲の人たちに、散々な迷惑をかけていたのです。こうした脱落者の家族は、一家の長や働き手が帰ってきたというのに、なぜか安定した生活を取り戻すことが出来ず、逆に、夫の介護やら、息子の暴力ざたの調停やらに、毎日毎日悩まされるハメとなっていました。
ちなみに、デルフィー共同体から脱落することのなかった者たち――つまりキンナラに付きしたがって不平のない者たち――は、すでにデルフィーの快楽から、一歩たりとも逃げ出せない中毒患者となっていました。
彼らはデルフィーを貰えるなら、たとえどこに隠れようとも、何度住処を変えようとも、一向に文句を言うでもなく、キンナラの背中を追えるような追随者となっていたのです。

ところで、人数が減ったとはいえ、どうして百人を越えるような大所帯が、こんなにも長いあいだ、目ざとい勇者たちの探索から、姿を晦ましていられたのでしょう。
それについて、最もはっきりとしている理由は、良好な地理的条件です。
火山島には「風穴」と呼ばれる地下空間が生じることが多く、テピト・テアナには、その風穴がまことに沢山あったのです。しかも大きいものになると、まるで地下に広場を作ったかのように見えるものま

であり、キンナラの一行は、そのような空間を見つけては、ここにスッポリと身を潜ましていたのです。

キンナラの霊的な勘は、それまで誰にも発見されていない風穴をも探しあて、このため、キンナラたち一行が身をよせる場所は、島中に、ほとんど数限りなく現れることになりました。ゆえに、島の勇者たちの探索から逃れることなど、まったく造作もないことだったのです。



img042.jpg

さて、暗い風穴のなかでは、初冬の冷気から身を守るために、いくつもの薪が焚かれており、そのために、見たところ風穴内では、まるで一日中夜宴が催されているかのようでした。事実、この風穴で生活している男たちは、定時によらず眠りにつき、それ以外のすべての時間を乱痴気騒ぎに費やしています。

それでも、およそ正午を過ぎた頃になると、この陰気な穴ぐらの中には、

「偉大なるキンナラさま、マゴラーさま。どうか私たちのために、聖なる薬デルフィーをお与えください」

という、中毒者である男たちの声が一斉に唱和されます。

そして、この唱和に応えて、キンナラによる問いが男たちに投げかけられるのですが、その内容たるや、つねに同一のことを繰り返すばかりでした。すなわち、

「薬を欲しがるお前たちが、そのために、しなければならない事とは何か」と。

「それは巫女を憎むこと。家庭を蔑ろにすること。デルフィーを否定する全ての人間に恨みを募らせることです。そして私たちは、この全てに励みます」

多くの男たちによって、この言葉が唱和され、また何度も繰り返されました。

「ひひひ、そうだよ。まったくいい子たちだねえ。可愛いねえ。ようし薬をやる。お前たち、きちんと一列にお並び。マゴラーの手から、ちゃんとデルフィーを貰うんだよ」

マゴラーであるイドが、器に薬を流し入れてやると、男たちは、それこそ無上の喜びを露にして、一気にデルフィーを飲み干しました。とてもこの世のものとは思えない、それほどにも醜怪な笑みをうかべて。

風穴では、日に二度供される食事を挟んで、こうしたデルフィーの投与が三度行われます。それ以外の時間は、男たちの場合、酒を飲んでいるか、また眠っているかしていましたが、狂気の集団のなかで一応の正気を保っているキンナラと“イド”は、この時間を使って、唯一まともな人間同士の会話を楽しんでいました。

「あのバカ中毒者どもも、落ちるところまで落ちてきたねえ」

「それが俺の復讐になっていくんだな」

「ああ、もちろんさ。ことは順調に進んでる。みんな死ぬだろうさ」

などなど、そのような話が、キンナラとイドとの間でなされていたのです。

しかし今日ばかりは、マゴラーがイドに戻って、その緊張をほぐしてもいられません。なぜなら、この汚濁にまみれた風穴に、まったく場にそぐわない「まともな人間」が訪れてきたからです。これにはキンナラでさえ驚いた様子でした。

「この風穴を見つけるとはね。この寒い季節に、それも女一人なんだから驚くよ。砦の人間とも思えないし、一体どこから来なすったんだい、お前さんは」

中毒者たちが暮らす広間とは隔離された、キンナラとマゴラーのために設えてある一室で、老婆が探りを入れるようにして尋ねました。

「ラノ・ララク大火山の近くの村から……名はアンナと言います」

そうおずと答えた中年女性は、もちろん薬の狂気とは縁のない瞳をしています。しかし、僅かにつり上がった眼尻は、老婆たちに対する敵意らしいものを燃やしていました。

「デ、何なんだ？　デルフィーが欲しくてヤッテ来たのか？」
異国人マゴラーがそう問いましたが、アンナはキンナラの方しか見ていません。
「私は、ただ夫を連れ戻すためだけに、ここに来ました。来たというよりは、偶然に辿り着けたという感じですけど……ともかく、私は何としてでも、夫をこの暗い地下から引きずり出し、私と一緒に家に帰ってもらうつもりです。あなた方が、どう抗弁しようと聞く耳は持ちません。あなたたちは間違ってます」
「ナンだと！　このアマ、そんな口をキクとただじゃオカンぞ！」
そうやって凄むマゴラーの巨体は、しかしキンナラの細腕によって制されました。
そのキンナラがアンナに向かって口を開きます。
「随分ハッキリとものを言う女だね。でも、あたしはね、お前に対して、中毒者たちを使って乱暴することも、それどころか殺してしまうことだって出来るんだよ。口には気をつけた方がいい」

img043.jpg

キンナラは、無頼衆の親分よろしく、異様に落ちつきはらった目でアンナを凝視しましたが、婦人のほうも、それに対して引き下がる気は、一歩たりともなさそうでした。
「乱暴でも殺害でも、勝手になさってください。私の言葉に耳を貸さなかった主人も、私の死骸を見た日には、さすがに目を覚ましてくれるでしょうから。まともになった主人が家に帰ってきてくれれば、私はいなくとも、二人の子供が、あの人を迎え入れてくれるはずです」
アンナのその固い覚悟は、キンナラが放つドス黒い威厳をも軽くあしらってしまいそうな勢いです。マゴラーは自分たちの気勢を案じて、再びアンナを威圧しようとしましたが、それを、またしてもキンナラの手によって制されてしまいました。
「子供が、ねえ。マゴラー、お前はこの部屋から出ていっておくれ。あたしは、この女と二人で話をしたくなった」
「ナ、何だって？　そんな婆さ……イヤ、キンナラさま……」
「あたしは出ていけと言ったんだよ」
キンナラの冷厳な口調がマゴラーの反抗を縛り、それによって彼の巨体はすみやかに、この部屋の中から消えてなくなりました。

女二人だけが残された部屋で、キンナラが口を開きます。
「アンナさんよ、ねえ、なにも言わずに帰ってもらえないかね」
「お断りします」
「でも、子供を置いてここに来たんだろう？　それじゃ残された子供たちが可哀そうじゃないか。帰っておやりよ」
「そうかもしれません。でも、これから子供たちを育てていくためには、どうしても夫の力が必要なんです」
そうアンナが不動の決意を表すと、キンナラの表情が、後ろめたさを隠しながら相手を嘲笑するような、そうした複雑なものに変わりました。
「そんな心配はいらないんだよ。だって……子供がそう育つほどには、お前たちテピト・テアナ人には、生きていられる時間が残されていないんだから」
「どういう事ですか？」
キンナラはフンと鼻を鳴らしてから、アンナと目を合わさないようにして言いました。
「お前たちはもうすぐ死ぬのさ、一人残らずね。だからさ、こんなところで時間を無駄にしてないで、さっさとお帰り。そして、残された短い時間を、かわいい子供たちと一緒に過ごしておやりよ」
「は？」
いきなり自分たちが死ぬと言われても、素直に現実感が湧くはずもありません。アンナが、キンナラに反発するのは当然のことでした。
「何を馬鹿なことを。信じません、そんなこと」
「じゃあ無理やり帰すしかないね。あんたの夫は、あたしたちの大事な仲間なんだし、その仲間を奪おうとしているあんたは、邪魔者以外の何者でもないからねえ。あんたには、とりあえず目隠しをしても

らう。そうしてから誰かに、村近くまで送り届けさせるよ。そうすりゃ永遠にサヨナラだ」
その言葉を聞いて、アンナは突然部屋を出て行こうとしました。強行突破して夫のもとに辿り着こうとしたのです。しかし部屋を出たとたんにマゴラーにつかまり、すぐにキンナラのもとに帰されてしまいました。

キンナラとアンナ、またもや一対一の対決状態です。
「村に帰されるならそれでも構わない。私は絶対に、絶対にあなたたちの居所をもう一度見つけ出してみせる」
と、まずはアンナが歯を剥きました。
「そりゃ無理だよ。今回はほんとうに滅多にない偶然だったんだ。もう一度見つけ出そうとして見つかるもんじゃない」
そう言いながらアンナの目を見ると、そこには鬼気迫った憤怒の炎が燃えています。キンナラは、その様子を見続けながら、ハァ、と一つため息をつきました。それから声を落とし、急に妙なことを言い始めます。
「けど……それでも子供を育てたいというのなら、月が赤く見えるほど大きくなったとき、あたしが店を出していた海岸で待ってるがいい。子供と一緒にね」
「海岸で、子供たちと一緒に、なぜ？」
しかしキンナラはアンナの問いに答えようとはせず、部屋にマゴラーを呼び、アンナに目隠しをさせました。
「この女を誰かに、近くの村まで届けさせるんだ」
そう言うと、アンナ自身も騒ごうとしなかったため、部屋のなかには、すぐにキンナラ一人だけになりました。そして、そうやって一人となった部屋で、キンナラがどこか悔しそうな表情を浮かべて、ポツリと独りごとを口にしました。
「だから女は嫌なんだよ、甘くなっちまうじゃないか。それだから女にはデルフィーを飲ませなかったし、風穴にも足を踏み入れさせなかったのに。
だって、あたしが悪魔に魂を売ったのだって、男どもに人生を滅茶苦茶にされて、そのうえ子供まで奪われたからじゃないか。だから男どもに復讐したくて、世界の男ども全員に復讐したくて……
なのに、あんな女を見ちまったら、そこに昔の自分を重ねちまうじゃないか。アンナだって、バカな夫に家庭をダメにされて……それで子供を置いてまでここに来たんだ。そんな女を見ちまったら……あたしは悪魔じゃいられなくなっちまう」

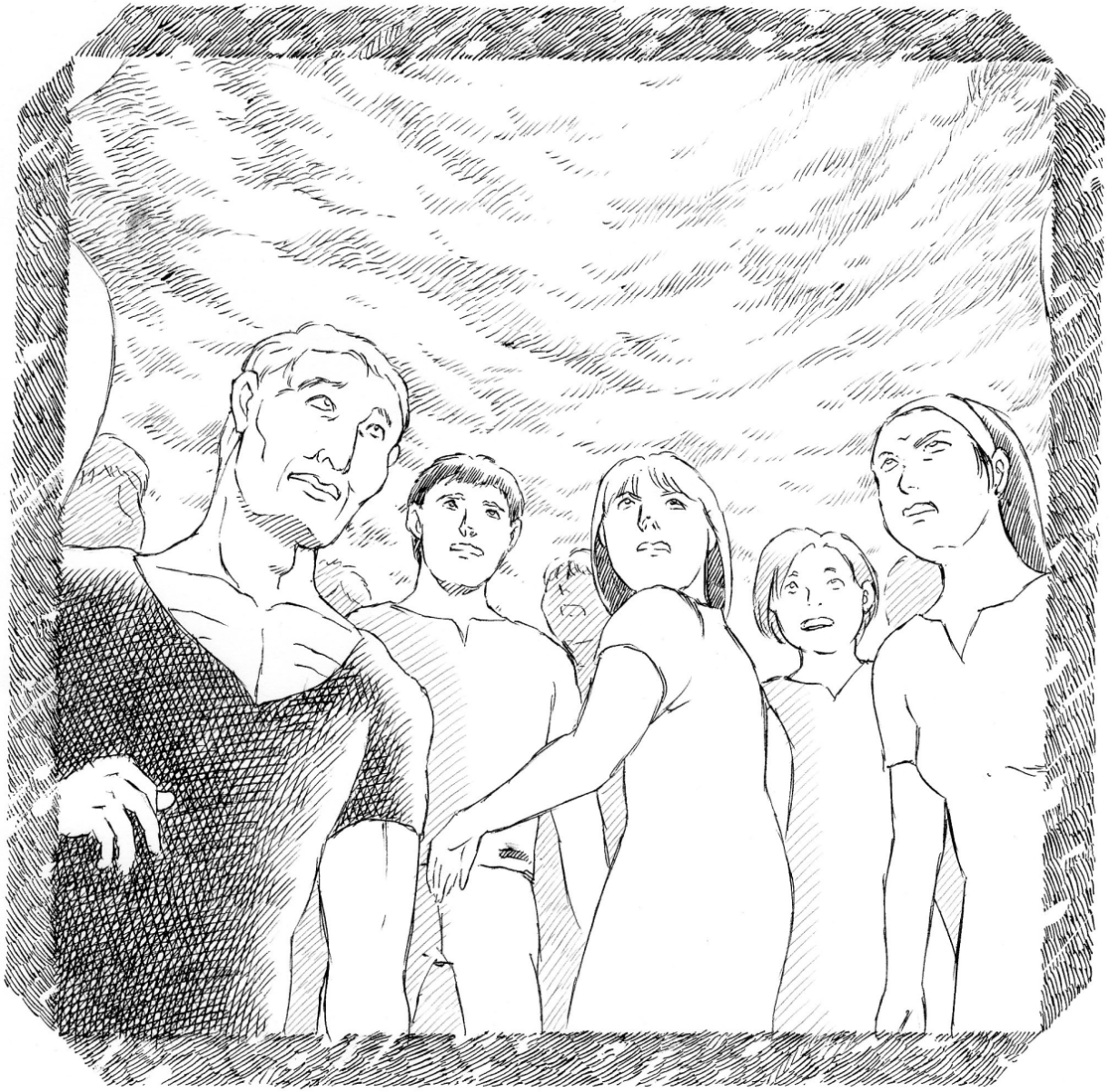
（２）圧力の過程

勇者アサジの旅立ち、それは島に残ったチェリアにとって、また他の島人たちにとっても、大いなる苦難の幕開けを告げるものになりました。

その日以来オンパロス（空の種、ヘソ石）は加速をつけて、どんどん膨らんでいき、そうして大きくなるにつれて、島に住む人たちの体は、常時、頭上から何かに押しつけられているような重みを感じるようになったのです。

いえ、そういう疑問を持ったのも束の間、あいまいな違和感は、間断なく続く明確な不快感と苦痛へと変化していきました。体を圧迫する力は日ごとに強まっていき、少しずつ、しかし確実に、人々の体から自由を奪っていったのです。島の異常に誰もが気づくまでには、まず一週間もかからなかったと言えるでしょう。

島の状況は、それほどにも急激な変化、というよりは一途な悪化を辿っていました。



img044.jpg

砦の人間たちにデルフィー中毒者たちの探索を続行させつつ、チェリアは、この頃になると、島のあらゆる村落に足を運んでは、そこで熱心に弁を振るうようになっていました。つまり各村で演説に精を出していたのです。

その演説の内容は、創世の物語、膨らんだオンパロスが意味することなどで、彼女のもとに集まってくるのは、たいがいが女や子供たちでした。

「なぜ島の男たちがデルフィーなる薬の虜になってしまったのか、その詳しい原因は、巫女の私にも話すことができません。正直なにも分からないのです。空が減っている原因は彼らにあるというのに、ええ、まったく情けないことです。

しかし、私にも分かっていることが三つだけあります。

ひとつは、このままでは島のすべての人間が、天の底に押しつぶされてしまい、残らず誰もが死んでしまうということ。ふたつ目は、失踪した男たちが、数割程度ではありますが、いま家に戻ってきていることです。

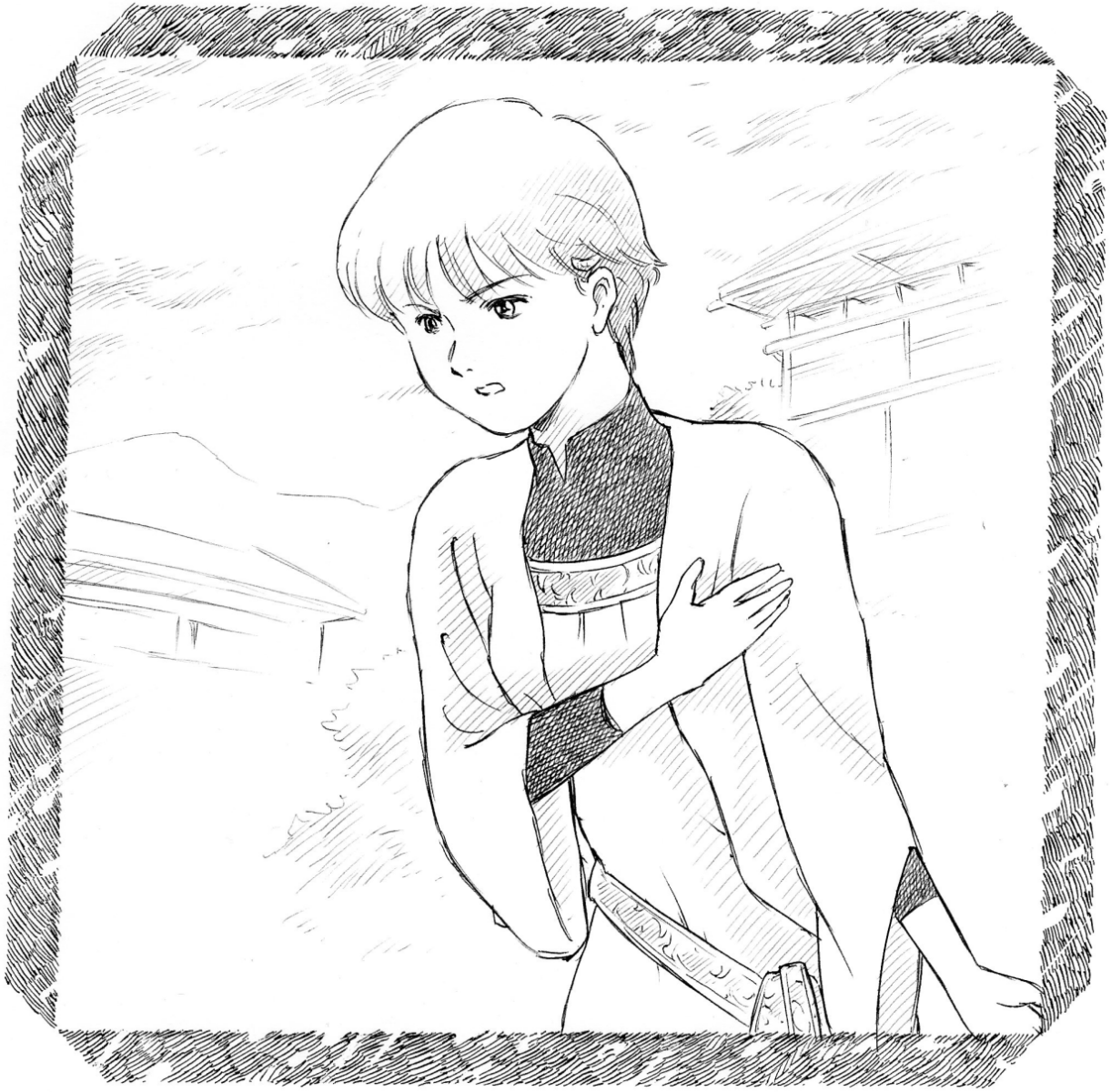
しかし私は、知っていることの三つ目として、そうして家に戻ってきた男たちが、家庭を軽んじ、いまも家族たちに迷惑をかけている事を挙げなければなりません」

このように巫女が語るのを耳にして、集まった女たちは「まったくその通りだ」とばかりに首を頷かせました。チェリアの訴えはさらに続きます。

「この危急存亡のとき、皆さんは何をすればいいのでしょうか。

私から与える課題は、まず皆さんが夫になりかわって、一家庭を背負うだけの気概を持つこと。そして、家に帰ってきている夫、息子、兄弟、父親などに、ひたすら無私な愛情を注いであげることです。決して、おかしくなった彼らを責めろというのではありません。できるかぎり優しくしてやってほしいのです。

この期に及んで何を生ぬるいことを、そう思われるかもしれません。ですが、男たちは正論で詰られたとしても、その正論を理解するだけの理性すら持ってはいないのです。意味が分からない言葉を聞かされるのであれば、責められ、周りから煩くされればされるほど、逆に彼らは、その家庭から逃げ出そうとするでしょう」



img045.jpg

それでは何にもならない、そう言うと、チェリアは集まった女たちの顔を見渡してから、ふっと優しい表情を浮かべて言葉を続けました。

「いまは彼らを責めるのではなく、妻や母としての優しい愛情をかけてやってください。そうする事によって、彼らに、薬を飲むまえに過ごしていた、かの幸せな家庭生活を思い出させてやってほしいのです。ぜひ、そうしてほしいのです。

男たちは、思い出した家庭生活の、その幸せな情景のなかに、かつての自分の姿を見つけることでしょう。過去の自分をです。

そして、そうやって昔の自分を知ることによって、彼らは、過去と現在の自分を見比べることが出来るようになります。

それによって、そこに大きな落差を感じることも、現状の醜さを知ることも出来るのです。そうなれば、彼らはおそらく、現在の自分のことを、醜い自分のことを後悔するようになるでしょう」

チェリアは、祈りよ届けとばかりに語調を強めました。

「後悔が男たちの顔に浮かぶとき、その時こそ、女性のみなさん、あなたがたは明確な言葉によって、場合によっては激しい言い方でもって、男たちを諭さなければなりません。何がいけなかったのか、また何を改めるべきなのかを彼らに教えなければなりません。優しい愛を厳しい語調で伝えなければなりません。そうして彼らの目を覚まさなければなりません。

その時こそ、男たちは自分の罪を認め、そうして自分を立ち直らせようとするでしょう。ここから全ての立て直しが始まるのです。

それまでの事です。いつになるか分かりませんが、それまでは、皆さんは柔和な態度で男たちに接していてください。お願いします。きっと大きな忍耐を必要とするでしょうが、それでも、それが島を救うのだと思って頑張ってください」

それは多くの人々の胸をつく立派な演説であり、もっとも堅実で間違いのない問題対応策でした。が、惜しむらくは、その試みの結果が出るまでに、どうしても長い時間がかかってしまうという難がありました。

このため、状況が良くなることを目指してはいても、なおしばらくの間、オンパロスの膨張、空の減少を覚悟しなければなりませんでした。もちろん、それに伴う環境の悪化もです。

アサジの一行が島を発ってから一月もすると、島の様子は、以前の姿を忘れさせるほどになりました。戸外を歩く人がめっきり減ってしまい、島のどんな地域でも、道ばたで人影を見かけることが無くなってしまったのです。

しかし、それも仕方ありません。なにしろ外を歩くことは、人々にとって、もはや水中を歩くのにも似た、非常に不自由な行為であったからです。

実際、体が重いと、ただ前に進むだけのことにも体力が要るようになりますし、まして走るとなれば、そうとうな消耗の覚悟が必要でした。こうなると、食物を取りにいく時などはともかく、必要性がないかぎり、とても外歩きする気になどはなれません。

誰もいないテピト・テアナ。荒涼とした島の様子は、以前の明朗さ、艶やかさを、ほとんど想像もつかないまでにしていたのです。

それから二週間、状況はさらなる深刻さを呈していました。

この時分にあっては、終日家に閉じこもり、何があろうとも戸外に出たがらない、そうした者が、島民の大部分を占めるようになっていました。ほんの短いあいだに、頭上からの圧迫感は獰猛なまでの苦しみを与えるようになっており、少しでも外気に触れたら最後、人々は、気が遠くなるような頭痛と、全身への締め付けを被らなければならなかったのです。

むろん、こうした中を、わざわざ巫女の説教を聞くために集まる者はいませんでしたし、そのような事はチェリアも期待してはいませんでした。

ですが、だからといって、チェリアが、巫女として果たすべき義務を投げ出すような事があるはずもなく、彼女は、この重い空気の底を、

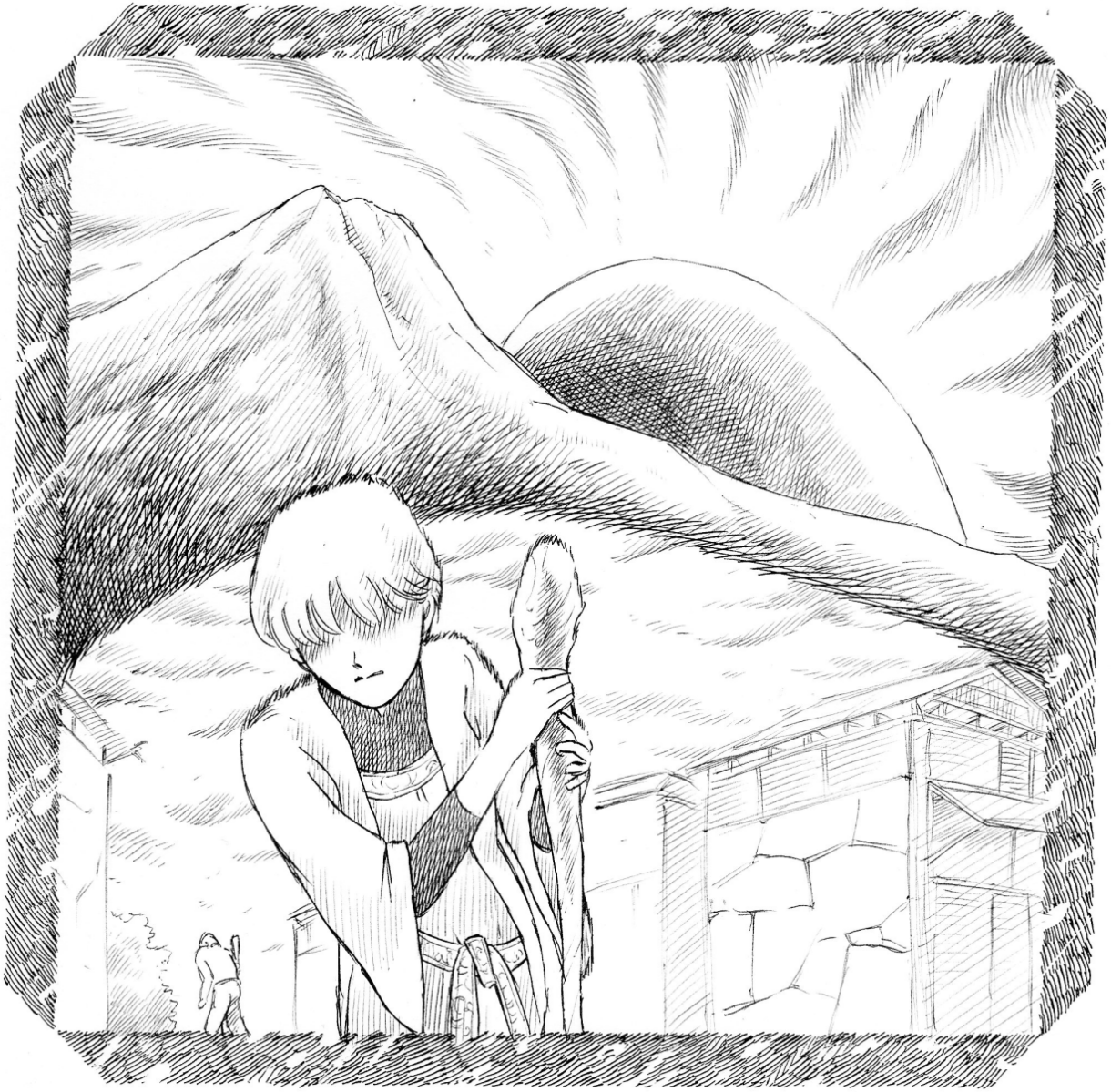
「人々が私のもとに集まらないのなら、私が人々のもとへ足を運ぶだけのこと」

と、個人個人の家まで歩いていったのです。そうして訪れた家々において、砦に蓄えてあった非常食を配ったり、必要とあれば、家に戻ってきている男たちの改悛を促したりしていたのでした。

そして夜、チェリアは、しばしばラノ・アロイ山麓の海岸に通い、そこにあるオンパロスの様子を見確かめていました。

「少しでも小さくなっていないだろうか」と、それだけに望みをかけていたのですが、ある晩など、空を吸い込んでいくという種は、チェリアが眺めているその間にも、満天の星空を背景にして、僅かに大きくなっていくのが認められるほどでした。

そして、探索中のデルフィー中毒者たちは、いまだに居場所を割り出せないでいます。



img046.jpg

勇者たちの出航から二か月。オンパロスは、すでに傍らのラノ・アロイ大火山と並び立つほどの大きさになっていました。ヘソ石はもとの丸い形をいくぶんか失っており、下のほうが平たく横伸びしています。このため遠くから見た場合、ラノ・アロイ大火山のとなりに、もうひとつ新しい山が出来たかのようにも見えました。

「もはや風も吹かない。毎年の恒例である冬の猛風がいまは吹かない。もう空の壁が機能しているんだわ。ああ、ただ寒さだけが身にしみる……冬だから、だけじゃない。こうして風のないことが、世界から切り離されたこの島の孤独を証明しているから」

この頃には、状況は、血気さかんな若者たちでさえ、外に出るには杖を使わなければならないところまで悪化しており、島民のために外を歩くチェリアも、これに倣って、今やお婆さんのような恰好で、家々を回っていました。

「どんなに苦しくても、自分が出来る精一杯のことをやらなくちゃ。そうしなければ、命をかけて旅立ったアサジさんに申し訳が立たないもの」

（アサジさんに……そう、私がどんなに弱い人間だったとしても、あの人に軽蔑される訳にはいかない。ほかの誰にさげずまれようとも、あの人にだけは）

夕暮れどき、このような思いを噛みしめながら歩いていたチェリアの耳に、さほど遠くない家から、女性の怒気をはらんだ声が聞こえてきました。どうやら泣いているらしく、そのわめき声は、虫の羽音のように細かくわなないています。

「あんた、馬鹿にするんじゃないよ……笑うんじゃないよ、この卑怯者！　もう嫌なんだよ。あんたら男たちのせいで、こんなにも苦しまなくちゃならないのは。あんたのせいだよ、あんたらのせいだよ」

肥満しているせいか、かなりドスの効いた声でさけぶ妻の言い分に、その夫のものらしい、緩んだ弦のような音声が答えます。

img047.jpg

「うるせんだよ、レェゼ。なんでテメエなんぞに、そんな指図を受けなくちゃならねえ？　女に男の辛さが分かってたまるか。俺は自由な人間なんだ。なのに家庭ってやつは、そんな男に取りついて自分を養うんだ。まるで寄生虫のようにな。ちくしょう、女房の顔なんて見たくもない。ああ、帰ってくるんじゃなかった」

「寄生虫だって！　あっ、あんた、それがあたしに向かって言う言葉かい。もう嫌だよ、もうあんたの世話なんて絶対に御免だよ」

そうやって言いあう夫婦のあいだに割って入り、チェリアは泣いている妻の肩を強く抱いてやりながら、その耳に小声で囁きました。

「レェゼさん、どうか我慢してください！　私の話を忘れたのですか。今は忍ばなければ、何を言っても逆効果になってしまいます。時機を得なければ、どんな望みだって叶えられません」

デルフィーは、たとえ少量の服用であっても、かなり長い期間にわたって、その影響が体内に残ってしまうようです。レェゼの夫は、麻薬が浸透しているのがあからさまに見てとれる、そうした濁りきった目でチェリアを睨みつけました。

「家庭ばかりじゃないぞ。キンナラさまは、俺たちの自由を縛る巫女のことも否定していた。だから、お前の話なんか聞く耳もたねえよ、フン。くっそ、なんだか頭も痛えしよ。ああ、デルフィーが欲しいなあ。あの薬さえあれば、この辛気臭い家だって、すぐさま天国に早変わりするってのによ、くそっ、くそっ！」

こう吐きすてるように言うと、男は、チェリアや妻がいるのとは反対の方向へ、すなわち家の裏口のほうへと歩いていきました。その足取りは、まるで千鳥足のようです。

「ミーコまで来ちゃってさあ、嫌んなっちゃったから、キンナラさまのとーころーに行こうかなあ、あ、おい、ははは」

そうやって鼻歌を歌いながら歩いていったのですが、いざ裏口を開けて出ていくと、どうやら空の重みにまったく慣れていなかったとみえて、とたんにしゃがみこみ、そこでゲーゲーと嘔吐を繰り返しました。

少しすると、それも多少は静かになったのですが、そうすると今度は、チェリアの胸に抱かれていたレェゼが泣き出しました。

（３）太陽と月の詩

「巫女さま、あたしは、もう嫌なんです。あんな人のために苦しむのが……あたしが何のために、こんな思いをしなくちゃならないのか、それが全然わかりません」

こうレェゼが言うのに対し、チェリアは、この場かぎりの馴れ合いにならないよう、出来るだけ慎重に、言葉を選んで答えました。

「たしかに苦しいでしょう。ですが、あなたの旦那さんは、それ以上の苦しみを背負っている病人なんですよ。あなたが一緒に暮らしているのは、悪人ではなく病人なのです。だから切り捨てるのではなく、病気が治るまでじっと待つべきなのです」

「でも、私には苦しすぎる……なのに、こんなに苦しいのに、あの人を恨んではならないのですか」

「あなたが旦那さんを恨めば、その恨みの念によって、また空は減っていくのです。それではあなたは、デルフィーの中毒者たちと、何ら変わらないではありませんか。あなたは、自分が島民を苦しめる側に立っても構わないというのですか」

「それは嫌です。けど……」

「はい、食料です。干し魚と米、僅かばかりしか持ち合わせていませんが、どうか食べてください。これだけでも気持ちが落ち着きますよ」

レェゼは、伏せた泣き顔を上げようとはしませんでした。それでもレェゼが、差し出された食料を、ちゃんと受け取るのを見たチェリアは、ほっと一息つき、

（とりあえず、この家を離れても大丈夫だろう）

そう安心して振り向きざま、戸口から夜空を見上げました。

そこには、いくつもの星や、月が輝いています。そして、天の底が近づいているせいなのでしょう。月の大きさが、以前とは比べ物にならないほど大きくなっていました。

チェリアは、その月光を浴びながら歩きだしましたが、そのとき急に、強く裾を引っ張られるのを感じました。レェゼの手が、去っていこうとする巫女を引き留めたのです。

2023-04-20(3).png

「ど、どうしたのですか、レェゼさん？」
チェリアが慌てて問うと、俯いたままで巫女の裾を掴んでいるレェゼは、涙を流しながらも、どこか不貞くされたような口調で言いました。
「巫女さま、この不幸は、私が女だから味わわなければならない、そういう不公平な不幸なのではないでしょうか。私が“女”だから、あんな男たちのために……だって女は、いつだって男が犯した、間違いの後始末ばかりしています」
「急にどうしたというのです。どうして、そのような考え方をするのです」
「分かりません、そんなこと。分からないけれど、考えが勝手に湧きだすんです。
でも巫女さま、私たちは、男たちに尽くすためだけに生まれてきたんでしょうか。もし本当にそうなのだとしたら、私は、こんな理不尽な世界など、すべて否定して生きていきます。男たちが、私たち女を苦しめても悔いないのなら、私のほうだって、男たちを心底苦しめてやりたいと思うのです」

レェゼは、自分が口にした言葉の恐ろしさにハッとなりました。
ですが、心に溜め込んできたものは、いまだ吐き出しきれていません。勝手に口をつくものは仕方ないので、彼女は、自分が恥ずべきことを言っているのを知りながら、それでも続けざまに、チェリアにその思いをぶつけました。
「私たちだって、男のように生活していくべきではないでしょうか。男たちに、身の程を思い知らせてやるべきではないでしょうか。もし、それが間違っているというなら、どうか私を納得させるだけの、反証を立ててみてください。私たち女が、男の下敷きになるために生まれてきたのではないと、それをハッキリと証明してください」
たしかに、今回の事件のことだけを見るのであれば、こうしてレェゼが訴えていることも、納得できないではありません。女たちが男たちの間違いを尻拭いをしている、言われてみればそのとおりです。
ですが、チェリアの場合は、巫女である自分のために、命がけで尽力しているアサジの姿を思い浮かべることが出来ます。そして彼のことを思うと、チェリアの中には「どうあっても、レェゼの訴えを正論としてはならない」そういう義務感が強く湧いてくるのです。
（そして、これは確かなことだわ。レェゼさんの訴えを、もし軽率に受け入れてしまったら、天の底が迫ってくるのを回避するなど、絶対に出来なくなるということだけは）
だからレェゼの言葉に頷いてはならない。それは巫女として当然のことです。

（では何を語ればいいのか）
そう考えながら、チェリアは、しかしレェゼに対して、何も言えない自分に出会わざるを得ませんでした。何を言えばレェゼに、女性の尊厳を教えることが出来るのか。
女性が男性以上のものである必要はない。しかし、女性が男性に劣ってはならない。ともに助け合う者として、同等のものとして、相手を尊重しあうようになるためには。
（そのためには何を語ればいいのか）
そう心中で堂々巡りをしながら、チェリアは救いを求めるように天を仰ぎました。

前述したように、天の底が近づいているため、以前よりも、月や星たちが大きく見えます。そしてそれは――皮肉なことですが――天が以前よりもチェリアたちの身近にあるということです。それはまた「天の力が、以前よりもチェリアに影響を及ぼしやすい」ということでもありましょう。

煌々と光っている天体を見つめていると、レェゼの煩悶を癒してやりたいと願うチェリアの胸中には、このあいだ目にした本の題名『月神セレネの仁慈』という文字が自然に浮かんできました。そして、

「月の慈しみ、月と星たち……」

こう呟いた瞬間のことです。まさに突然に、チェリアの内部で、なにか熱いものが閃光を放ちながら流れていく、そういう感覚が生じました。

「月は陽の輝きに浴して光る。
太陽は、おのれ自身を輝かせる……

だけど、この夜空を見て。
そこに、輝く太陽の姿はなく、
あるのは月と星たちばかり。

星たちは、
まるで月の光に服し従うかのように、
まるで月光を憧れ思うかのように、
その周りで小さな瞬きを見せる。
月に愛でられるのを欲するかのように、
その周りで小さな瞬きを放つ。

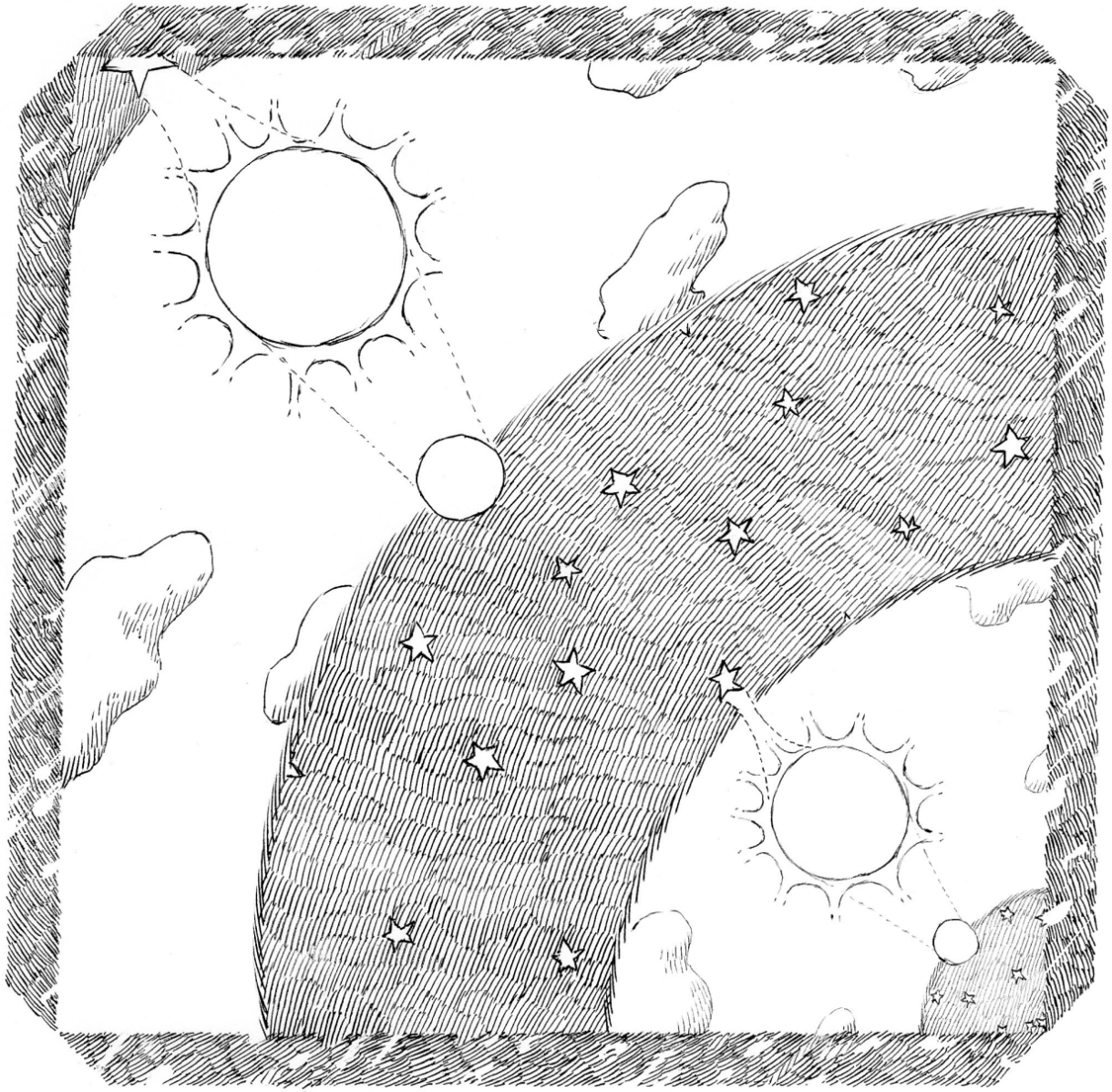
月は、これらの星たちを
統治してでもいるかのよう。
自分を求めてくる星たちを、
その美しさによって、
慈しみの微笑みによって
見守っているかのよう。
そう、慈しみによって、
月は夜空の星たちを統べている。

だけど、星とは何？
星は、
ただの小さな瞬きなんかじゃない。
星は、とおくに見える太陽の輝き。

遠すぎて、私たちを
明るく照らすことはないけれど、
星は、たしかに自ら光を放つ太陽。

きっと、その太陽の周りには
月が巡っているはず。
太陽の輝きを浴び、
それによって月が光っているはず。
月は、自分自身では、太陽なくしては、
決して、その身に
光を満たすことは出来ないから。

けれど見て。夜空において、
月は無数の星を統べている。
夜空において、
月は無数の太陽を統べている」



img049.jpg

それは詩でした。チェリアの口から、誰も知らない詩が流れ出てきたのです。彼女は、それをまるで当然のように、当たり前を語るように朗々と吟じていました。

（太陽が月を照らし、月が星を統べる。そして星は太陽……私ったら一体何を言っているのだろう。こんなこと、一度だって耳にしたことはないのに。

だけど、これが真実のことならば、月と太陽は、どちらが優れているというのだろう。慈しみを望み、それによって月に統べられている無数の太陽（星）たち。その太陽の輝きを浴びることなくば、すぐにも光を失ってしまう月。

これら二つは、まるで合わせ鏡のよう。

二つの鏡を向い合せたとき、どちらの鏡が、さきに他方の鏡を映したかと言い争うとしたら、その論じあいには何の意味もない。だって、どちらが先だなんて有りえないんだもの。だとしたら、男と女だって……）

チェリアは、自分の隣でキョトンとしているレェゼに、まだ興奮が冷めやらない口ぶりで言いました。

「私には上手に説明することは出来ませんが、でもレェゼさんが言うような、男女の理不尽な優劣などは、きっとありはしないと思うのです。

男と女は同じものではない、それは確かです。けれど、太陽と月がそうであるように、男女のどちらもが、自分に見合った形で、一つの世界を作るための助け合い、補い合いをしているんだと思うのです。そして、違ったもの同士だからこそ、助け補うことが出来るのだとも思います」

レェゼがチェリアの言葉を解しているのか、それは分かりませんが、彼女がチェリアから霊的な権威を感じていることは確かでした。いま喋っているチェリアの顔は、ほんの一目見ただけで分かるほど、人間ばなれした神秘感を宿していたからです。

「だからレェゼさん、私の言葉を信じてくれるならば、これからは男女の優劣など気にかけず、まずは旦那さんの心に、かつての輝きを取り戻させてあげてください。

男と女が、太陽と月にも似たものならば、その時にこそ、女性であるあなたも満月のような光に満たされるのですから。そして、その時のあなたの満々とした月光は、その慈しみによって家族という星たちを統べることになるのです。

ですから、そのためにも、今は旦那さんを責めるのではなく、どうか心から優しくしてあげてください」

そう言うチェリアの神秘的な面差しは、レェゼの素朴な信仰心を刺激せずにはおかず、

「私は、巫女さまが言っていることは理解していません。けれども私は、巫女さまが言っていることが正しいことだと知っています」

という、いかにも矛盾した言葉に、偽りなき真実の重みを与えました。

「そ、それでは」

とだけ言うと、深々と頭を下げるレェゼに、もはや一つの言葉もかけられないまま、チェリアの足は一途に祖父バッティーヤの家へと向かっていきました。

杖をつくのがもどかしく感じられるほど、この時のチェリアは、バッティーヤに一刻も早く会うこと

を望んでいたのです。
「この胸の暖かさが何なのか、この透明な気持ちが何なのか、お祖父さまだったら、私にちゃんと教えてくれるかもしれない」
しかし、実際に祖父の前に立ったとき、チェリアが、彼から与えられた言葉はたった一言に過ぎませんでした。もっとも、その一言に、バッティーヤは、島の歴史を背負ったような重みと、孫に対する心からの祝福をこめておりましたが。
「ならばチェリア、お前は今日はじめて、本物の巫女となったのじゃ」
「巫女に……」
チェリアは、その言葉を頭で理解することは出来ませんでした。しかし、先ほどのレェゼのように、その言葉を心で納得しました。チェリアは、
「巫女に……」と言ったとたん、とめどない涙を溢れさせたのです。こうして涙が出るのは、自分が心の真実を知ったからなのだと確信を抱きながら。

（４）沈黙の春

巫女チェリアの成長を嘲笑うかのように、デルフィー中毒者たちの住処では、ますます天の底を地上に近づけずにはおかないような、そうした醜悪な生活が、なお絶えることなく続けられていました。ええ、そこでは、まさに少しも絶えることなく、
「偉大なるキンナラさま、マゴラーさま。どうか私たちのために、聖なる薬デルフィーをお与えください」という声が響いていたのです。

img050.jpg

彼らは相変わらずの風穴住まいでしたが、外気の下を歩くのが困難なため、さすがに以前ほど頻繁には、住まいを変えることが出来ません。いま居付いている場所も、もう二週間あまりの滞留となっており、これは、今までの最長記録といえました。

そして、この長い期間にわたって、

「腹が減った！」

という嘆きは、他のどんな場所よりも、このデルフィー中毒者の住まいでこそ、切実に繰り返されていました。

彼らは、これまで盗みによって食料を賄っていましたが、いまは冬の真最中です。畑に行っても何もなく、当然のことながら、彼らが、砦からの食料配給など受けられるはずもありません。要するに食物を得られるアテが全くないのです。

このような状況では、中毒者たちも、老婆キンナラに不審を抱き、忠誠をひるがえして家庭に戻っていくだろうと思われるかもしれません。ですが、実際には、それとは全く逆のことが起きていました。

中毒者となった男たちは、空腹が募ればつのるほど、その苦痛から逃れようとして、より多くのデルフィーを求めました。薬を飲んでいるあいだは現実を忘れていられるからです。

つまり現実が苦しいものになればなるほど、そのぶん薬の摂取量が増えていくわけです。これによって、多くの者たちの中毒症状が、きわめて短い間に、ひどく重いものへと悪化していきました。

そうした重症の中毒者の前で、キンナラが巫女糾弾の言葉を叫びます。

「こうしてあたしたちを苦しめているのは、きっと巫女の呪いのせいに違いないんだ。カマトトぶった巫女め、自由を楽しんでるだけのあたしたちを、奴は、自分の言うことを聞かないって、ただそれだけの理由で呪ってやがるんだ。あの忌まわしい巫女の血統が、何やら妙な力を持っているのは確かなんだからね」

これに対し、マゴラーがわざとらしい合いの手を入れてきます。

「おお、巫女とは、ナンと醜い性根の女でありマショウ」

「まったくだ。奴め、嫌がらせに『空を重くする魔法』をかけて、こうやって、あたしたちを巧妙に飢えさせている。巫女に従っている連中も、それに足並みを揃えて、今頃あたしたちを呪ってるんだろうさ。

空が重くなりゃ、もちろん巫女たちも苦しいんだろうけど、奴らにとっては、その苦痛よりも、あたしたちを苦しめる喜びのほうが大きいんだよ。我慢くらべを決め込んで、あたしたちが先に泣きつくのを待っていやがるのさ」

「デハ、私たちが苦しみカラ逃れるタメニハ、一体どのヨウにすればイイノでしょう。今のままデハ、アマリに苦しすぎるのです」

「苦しみから逃れるためには、苦しみの原因を取っ払ってしまわなくっちゃね。そりゃ、子供にも分かる道理だろう。つまり、あたしたちを呪ってる巫女を、今度は、あたしたちの方が呪ってやるんだよ。あたしもちょっとは呪術を知っているから、お前たちが力を貸してくれれば、きっと巫女を呪い殺せるだろう。そして奴が死んで空の呪いが消えたなら、万事それで解決さ」

こう言われて、デルフィー中毒者たちは、命じられるがままに巫女を呪いました。そして、その強烈な怨念が、より天の底を地上に近づけると、その苦しさから、さらに輪をかけて巫女を呪うのです。

ともかく恐ろしい悪循環と言えましょうし、この悪循環が、どんなにか天の底接近の速度に拍車をかけたか知れません。

アサジが出発してから三か月半、キンナラが煽った呪詛の力は、果たして、空の重みをほとんど毎日ごとに増幅させていきました。状況は、もはやどうにもならないところまで来ており、訪れる家々でチェリアが語れるのも、今では女たちに対する、単なる励ましだけになっていました。

「もうすぐアサジさんが、アトラスたちを連れて帰ってくるから……」

と、今やそれぐらいのことしか言えないのです。

しかし、テピト・テアナにも春はやってきます。いえ、やって来るはずだったと言うべきでしょうか。なぜなら、その時期は訪れても、実質は何もない春でしたから。

この頃、辺りはいくらか暖かくなったものの、春到来を告げる花々や、一面に緑を彩るべき草木の種たちは、空からの圧力のために、どうしても地表まで芽を吹き出させることが出来ませんでした。

また、もともと地上にあった木々も、今では、そのほとんどが折れるか枯れるかしてしまっており、そのため春が来たといっても、島の光景はいまだに冬の姿、いな、冬以上に閑散としたものでしかなかったのです。

そして、悲しいことはこれに止まりませんでした。

この春という季節の訪れは、蝶々の舞いや花の香りを島に贈るかわりに「空の圧力のために、家々の屋根が崩れていく」という事態を引きおこし、恐怖に震える人たちに、この島で生き残れる限界を知らしめたのです。

「すぐにでも助けが来なければ、みんな天の底に押しつぶされて死んでしまう」

いまや誰もが、それをはっきりと感じるようになったのでした。

こうした中、連日のように無理をおして、村々を歩き続けていたチェリアは、その反動を食らい、高熱のために、砦で体を休ませなければならない状態になっていました。この間、人々に食料をはこぶ作業は侍従たちに任せてありますが、彼らの大半も、形はどうあれ、やはり何らかの形で体の不調を訴えていました。

「ほんとうに彼らには申し訳ない……私だけ寝ているなんて」

チェリアがそう呟きましたが、この申し訳ない気持ちが、病にふせっている彼女をして、ある一つの決断をさせる事になりました。

「もう、デルフィー中毒者たちの探索は打ち切ろう。これ以上の探索は無意味だわ。たとえ見つかったとしても、彼らを更生させられるだけの時間はない」と。

「……見えない三本の柱と、その柱をむすぶ辺が、この島と外部の空を隔てているのだとしても、そこには手に触れられる障壁があるわけじゃない。ただ、そこを区切りにして、空の流動が分断されているだけ。人が船で越えようと思えば、アサジさんたちがそうだったように、誰でも自由に、この空の牢獄から抜けていけるはず。

ならば、正常な人たちは言うまでもなく、家庭に戻っている中毒者たちも、無理やり縛ってでも船に乗せ、そうして島から離れてもらおう」

「島に残されるのは、失踪したままの男たち、異国の老婆と少年……そして私。

いままで天の底が地表まで落ち込まなかったのは、おかしくなってしまった人がいたのと一緒に、まともな心情をもった人たちも島に残っていたから。ということは、その正常な人たちがみな島を去ったならば、オンパロスは一気にすべての空を吸い込み、それによって天の底は、急転直下で地表に落ちてくるはず」

img051.jpg

握りしめた手は、今にも、その握力によって、チェリアの表皮を傷つけてしまいそうです。
「だけど、それでも島人すべてが滅んでしまうよりはずっといい。
そして私は、島の巫女として、テピト・テアナの運命に殉じよう。だって、この事態は、私の、島の巫女としての私の力不足によって引き起こされたものなのだから」
焦りと諦めが混じったチェリアの瞳には、まるで自分が死んでいく瞬間が見えているかのようです。
「あと三日……あと三日してもアサジさんが帰ってこなかったら、アサジさんが助けを連れて来られなかったら、その時にはこの計画を実行しよう。みんなを船に乗せて送り出そう。ああ、天の底が落ちてくるまでに、なお半年ぐらいの猶予があるなんて思ったのは、とんでもない予想ちがいだった。
アサジさんが発って三か月が過ぎたところだというのに、天の底は、もはや今すぐにでも地表に落ちてこようとしているのだから。そして、島が滅ぶまでに半年の猶予があると信じているアサジさんは、いまだに帰ってこない」

（５）希望の帰還

チェリアの熱は翌日になっても下がってはいませんでしたが、自分のぶんまで働いている侍従たちのことを思えば、そのまま休んでいる気になど到底なれません。
（仮にアサジさんが帰って来られなかったら、私が生きていられるのは、この三日の間だけなのだもの。少しぐらい無理をしたって、どうってことはないわ。少しでも多くの家々を訪ねて、そこに食料なり言葉なりを残していこう）
しかし、そう気負いたっても、いざ砦の門から外へ出ると、ただそれだけで、チェリアの体は、まるで万力に挟まれたかのような圧迫感に襲われます。杖を使っても背中が丸くなり、華奢な足は、肩幅ほどの距離すら、二、三度動かさなければ進みませんでした。
（思ったとおり、もう最終的な限界が近づいてる。島民を全滅させないための脱出計画は、今を逃しては、もう実行することが出来ない）
唇を噛みしめるチェリアの額に、高熱とは無縁の冷たい汗が流れます。

熱のためにはっきりしない意識、死の恐怖とにがい諦め……空の重圧にくわえて、これらの重荷を背負って歩いていたチェリアは、大して距離を伸ばせないまま、ほんの数件の家を訪れただけで、この日の夕暮れを迎えてしまいました。彼女が、砦への帰途につこうとした時には、すでに辺り一面が真っ暗であったほどです。
そうした暗がりを歩いているうち、握っていた杖の先が、なにか軽い乾物のようなものに当たったような気がしました。

確かめてみると、どうやら干からびた鳥の死骸です。空からの圧力のためにノッペリと潰れていましたが、それでも羽の特徴から、どうやらこれが海燕であることが察せられました。

これを哀れに思ったチェリアは、その海燕を、傍らの木の根元に葬ってやりました。

「どうか深く、安らかな眠りを……」

そう言って海燕の冥福を祈ると同時に、チェリアはしかし、

「かつては海燕たちの楽園だったテピト・テアナ……そして今、その同じ島に転がっていた、あまりにも惨めな鳥の死骸……そういえば、もう、ずっと鳥たちが飛んでいるのを見ていない。

けれど、それも仕方ないんだわ。こんなに重い空のなかでは、どんなに頑丈な翼だって羽ばたくことは出来ないもの……でも悲しい。鳥が飛ぶこともできない島、私たちは、テピト・テアナをそんなところにしてしまった」

という言葉が湧きだすのを、どうしても止められなくなるのでした。

img052.jpg

チェリアは、砦に戻るとただちに祭壇がある部屋に向かい、そこに置かれた神像の前で、歳に見合わぬほどの厳粛さをもって瞑目しました。

（神さま、どうか、あの鳥に死後の安らかな生活を与えてあげてください。せめて霊の世界では、心ゆくまで大空を飛び回らせてあげてください）

チェリアはそう祈りながら、同時に、息苦しいほどの絶望を噛みしめていました。天と地を結びつける場所である「空」。その空で生活している鳥の死は、天地両者の完全な決裂を象徴しているように思われたからです。

（天と地をむすぶ鳥は死に、タンガナ――鳥の人――の精神は滅んだ。天と地をむすぶヘソの緒はたち切られ、胎児である私たちは死んでいく）

そんな悲嘆に沈むチェリアでしたが、それでも、ただ一本の命綱だけは残されていました。島民たちの命をつないでくれる大切な綱紐がです。といっても、その綱紐は、あまりにも脆いワラ縄でしかありませんでしたが。つまり、アサジたちの帰還という、きわめて実現する可能性が低い命綱のことです。

（彼らさえ帰って来たなら、とりあえず急場はしのげる。けれど、その帰還を期待することは、今では馬鹿げているとすら言える）といった具合に。

「アサジさん……」

しかし、チェリアが、そう小さく命綱の名前を呟いたとき、ふと祭壇の神像が微動して、かすかながら物音を立てました。すると、その物音に和声づけするかのように、チェリアの心が、その奥のほうで鋭く琴線をはじく音を立てます。ピン！　と。

「帰ってくる！」

巫女の血が何かを感じたのでしょう。外気はあいかわらず重く、足元は危険なほど暗いというのに、チェリアは、叩くようにして砦の門を開けると、そのまま一路海岸に向かって歩いていったのです。

もっとも、歩くといっても「杖をつきながら、やっとのことで」という状態ですから、そう素早く前に進めるものではありません。汗だくになりながら、それでも相当な時間が費やされ、目的の海岸についたのは、もう真夜中をとっくに過ぎた頃でした。

夜の冷気がただよう海岸に立ったチェリアは、一息つく間もなく、ぐるりと周りを見渡しました。が、そこにあるのは、ただ漆黒の海と不気味な潮騒ばかり。いくら目を凝らしてみても、アサジの船などは全く見えません。

「私の直観なんて、こんなものなのかしら」

そう言って苦笑すると、かけた期待が大きかった分だけ、ほてった体から急に力が抜けてしまい、自然とその場に座り込んでしまう事になりました。

ほっと一息つくと、闇のなかに二つの山影が見えてきます。この海岸は、ラノ・アロイ大火山の山すそに当たっているので、その山が見えるのです。

（でも、本当なら、見えるべき山は一つのはずなのに）

そのとおりです。本来ならば、見える山はラノ・アロイ大火山だけのはずでした。けれども、チェリアには二つの山が見えるのです。これはどういうことでしょう。

すなわち、二つの山とは、もちろん一つはラノ・アロイ山。もうひとつは、膨張しきったオンパロスであったのです。しかも今では、オンパロスのほうが、余裕でラノ・アロイ山の高さを凌いでいる有り様でした。

（あの山となったオンパロスは、その大きさによって、私たちが死に際に立っていることを証している）

そう感じ、焦燥にかられたチェリアが、居たたまれなくなって立ち上がった、その時です。顔を向けた海の方向に、一瞬ですが、何かの光が見えたような気がしました。まさかと思って目をこらすと、確かに、波の彼方で赤い光が明滅しています。

チェリアは、近くに転がっている木片を拾い上げると、すぐさまそれに火を灯しました。そして、ありったけの力でその松明を振り回すと、海上の光は、チェリアの呼びかけに答えるかのように、円を描くような激しい揺らめきを見せました。

「アサジさん……」

興奮して熱くなった唇に手を押しあてると、チェリアは、喜びあまって、その場で泣き崩れてしまうのでした。

チェリアがやっとの思いで溢れる涙を拭いおえた頃、暗闇から姿を現わした船が、静かに海岸へと辿り着きました。そして、今まさに、そこから降りてこようとしている、よく知った青年の姿。やがて巫女の前に立ったのは、間違いなく島の勇者であり、また許嫁でもあるアサジその人でした。

「アサ……」

チェリアはすぐに声をかけようとしましたが、しかし、そのチェリアの目に思いがけないものが映りました。見れば、アサジの脇腹に、ほんのりと赤く染まった布が巻かれており、彼自身、その部分を庇うようにしているではありませんか。

「怪我を負ったのですか！」

勢いこんで尋ねると、アサジは少しはにかんだ表情でコクと頷きました。

どう見ても小さな怪我ではありません。彼にしてみれば無論のこと痛いのでしょうが、アサジは、その顔に少しの苦悶も浮かべることなく、落ち着きはらった様子でチェリアを見つめるばかりでした。

「大したことはありません。そんな事よりも、チェリアさまが変わらずお元気そうなのが、私にとっては何よりのことです」

アサジが、そう包み込むような笑顔で言いましたが、一方、チェリアのほうは、この優しい言葉に、大いに戸惑わずにはいられませんでした。

（私が元気そう？）と。

たしかに外傷はないものの、高熱を出しているうえに、いま現在、重い空のしたに我が身を置いているのです。そうです、明らかに苦しい身の上なのです。なのに、元気そう、というのは、いくら何でも的外れなのではないでしょうか。

何だか、これまで自分が味わってきた辛酸をまるきり無視されたようで、チェリアは、この無神経なアサジの言葉に、きつい皮肉の一つも言い返してやりたくなりました。

「あなたは、杖をつかねば、歩くことも出来ない者を元気だと言うのですか」

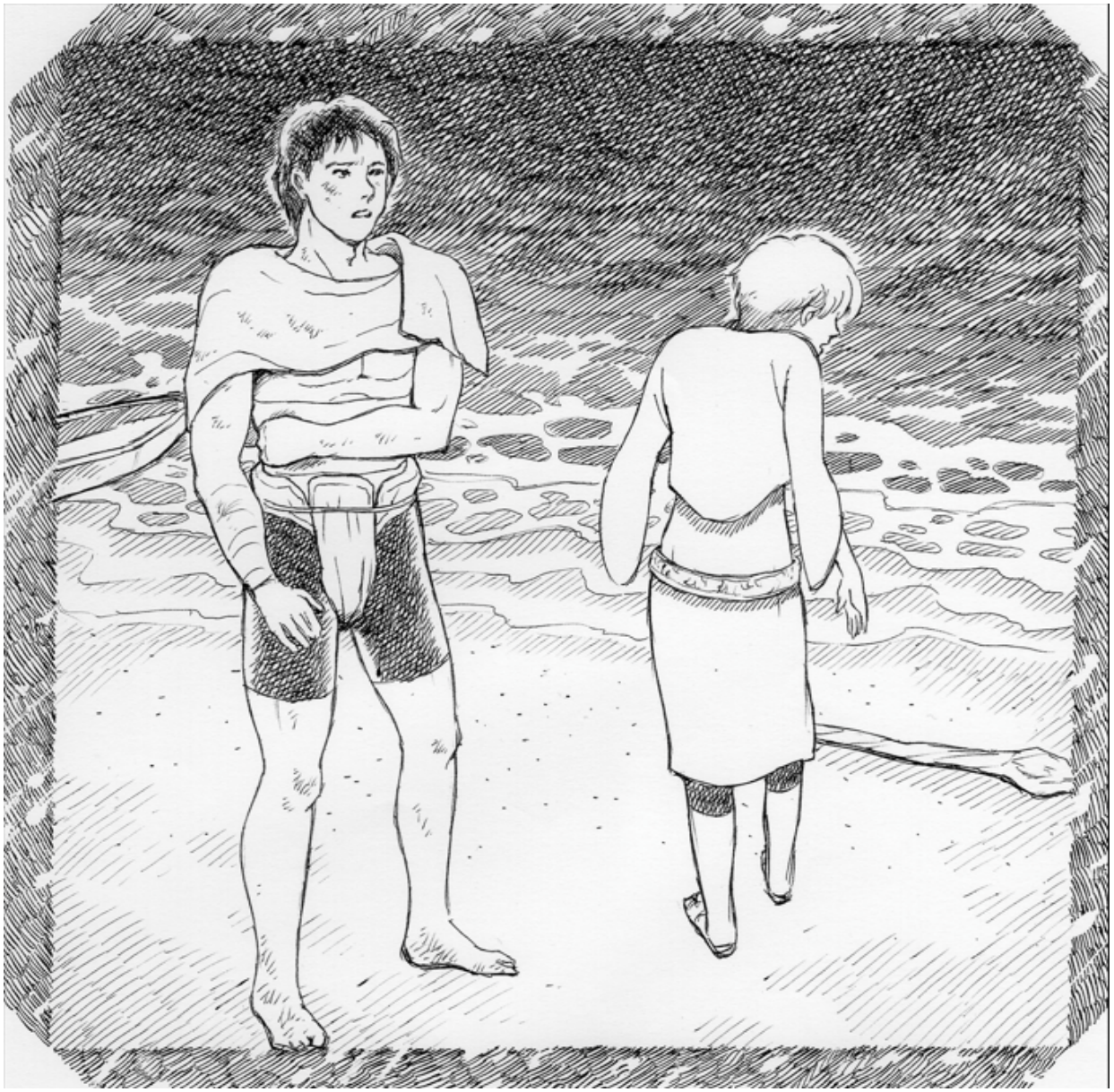
こう言ってやろうと思い、その右手をギュッと握りしめました。アサジの鼻先に、これみよがしに、苦しみの象徴である杖を突きつけようとしたのです。

ところがです。握った手のうちに杖がありません。

どうした事かと思って辺りを見回すと、杖は虚しく砂上を転がっています。その杖のほうを見た姿勢で、チェリアは口を開けたまま呆然となってしまいました。

（そんな馬鹿な……）

2023-04-20(5).png



そう思って当然です。だって、押しつぶされそうな圧力のため、一瞬たりとも手放せなかったはずの杖なのに、それを自分でも気づかないうちに、放り出していたのですから。チェリアの動きが止まってしまうのも無理はありません。

「何をなさってるんですか？」

アサジが、訝しげにチェリアに尋ねました。それはそうです。ものに憑かれたように辺りを見回すかと思えば、そのあとに急に呆然としている。これではチェリアは、ただの変な人です。

「何って……あっ！」

瞬間、チェリアには、自分が杖を持っていない理由がわかりました。

いえ、考えてみれば、分かったというより、それはすでに分かり切ったことでした。チェリアは、それに気づけなかった自分が信じられません。アサジと再会できた喜びによって、頭の中が白紙になってしまったとでもいうのでしょうか。

「……アトラスが来ているのですね」

いまチェリアは、頭上からの圧力をまるで感じていません。

このように空の重さが消えたということは、そうなった理由として、一つにはデルフィー中毒者たちが改心したためにオンパロスが縮んだか、でなければ、何者かが無理やりに天の底を押し上げたか、そのどちらかしか考えられません。

（中毒者たちが、そんな急に改心できるはずはない。だとすれば、やはりアトラス。アトラスが天の底を持ち上げてくれてるんだわ。

それに、そうやって、アトラスが天の底を支えているのだとしたら……彼と一緒にいたアサジさんは、巨人の上背のせいで、空の圧力とは無縁だったはず。だから、私の苦しみに気づかなかったのだろうし、元気そうだなんて、あんな事を私に言うことが出来たんだわ。彼に悪気があった訳じゃないのよ）

そのように色々と考えているチェリアをよそに、アサジが淡々とした口ぶりで話しだしました。

「島にやってくるアトラスの数は、三百名ほどです。まだ暗くて見えませんが、すでに彼らは島の近くまで来ているのです。やがて夜が明けさえすれば、私の言葉を信じてもらえるはずです」

やっぱりアトラスが来たんだ、とそう安堵すると共に、アサジの自信にみちた声を聞いたチェリアは、あまりの嬉しさに何も言えなくなってしまいました。そんな巫女に、

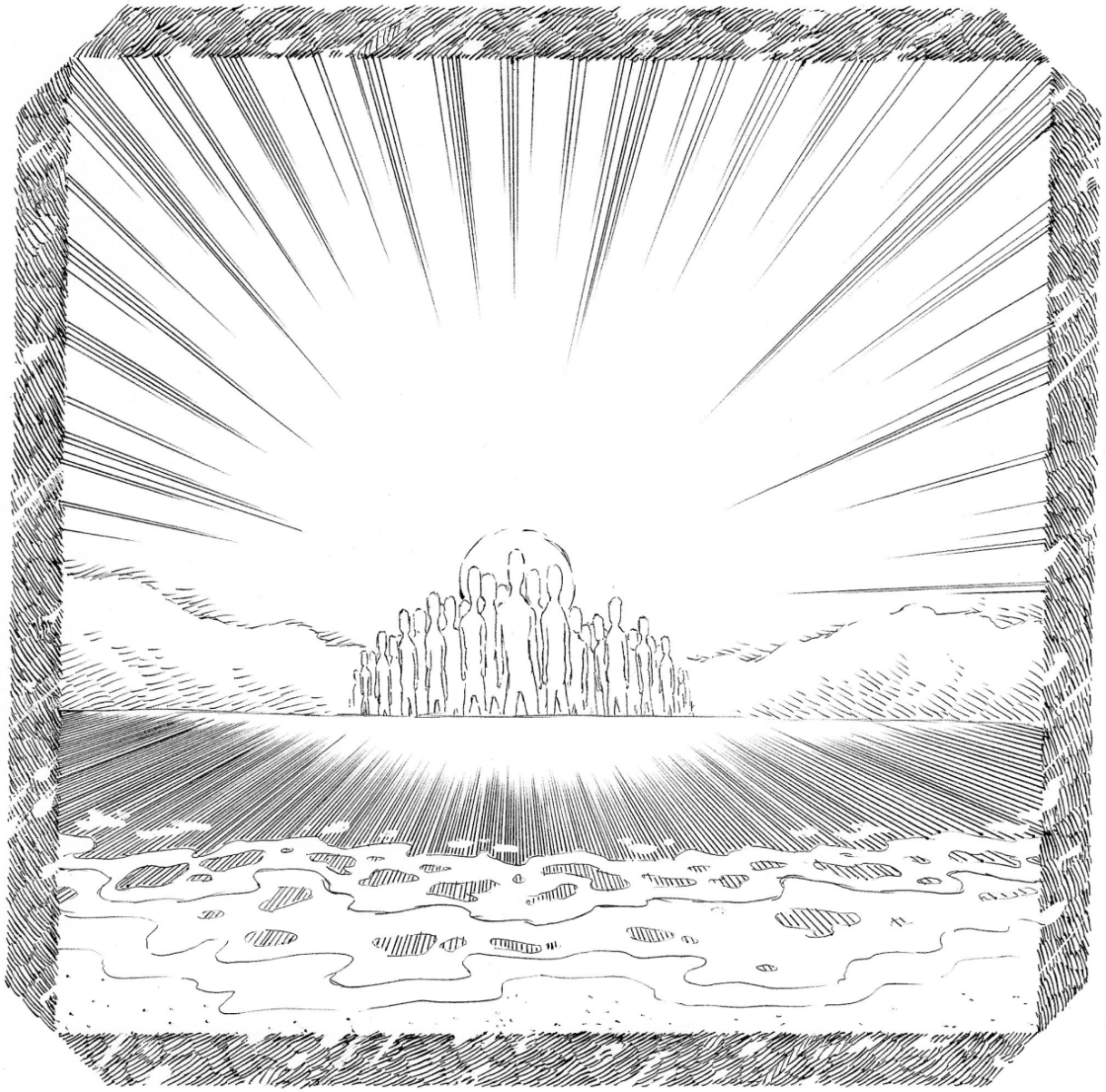
「中に、一人だけ青い体をしたアトラスがいます。その者だけは人語を話すことが出来るので、到着し次第、すぐにチェリアさまにお引き合わせいたしましょう」

と、悠然とした笑顔を浮かべながら、アサジが付け加えるように言いました。

アサジの部下たちも次々と船を降り、やがて長かった夜が白々と明けていきます。

朝陽を背にして立ちならぶ巨人たちの姿は、とてもこの世のものとは思えない美しさでした。それはまるで、この島を祝福するために、神々が光をまとって天上から降臨してきたかのようです。

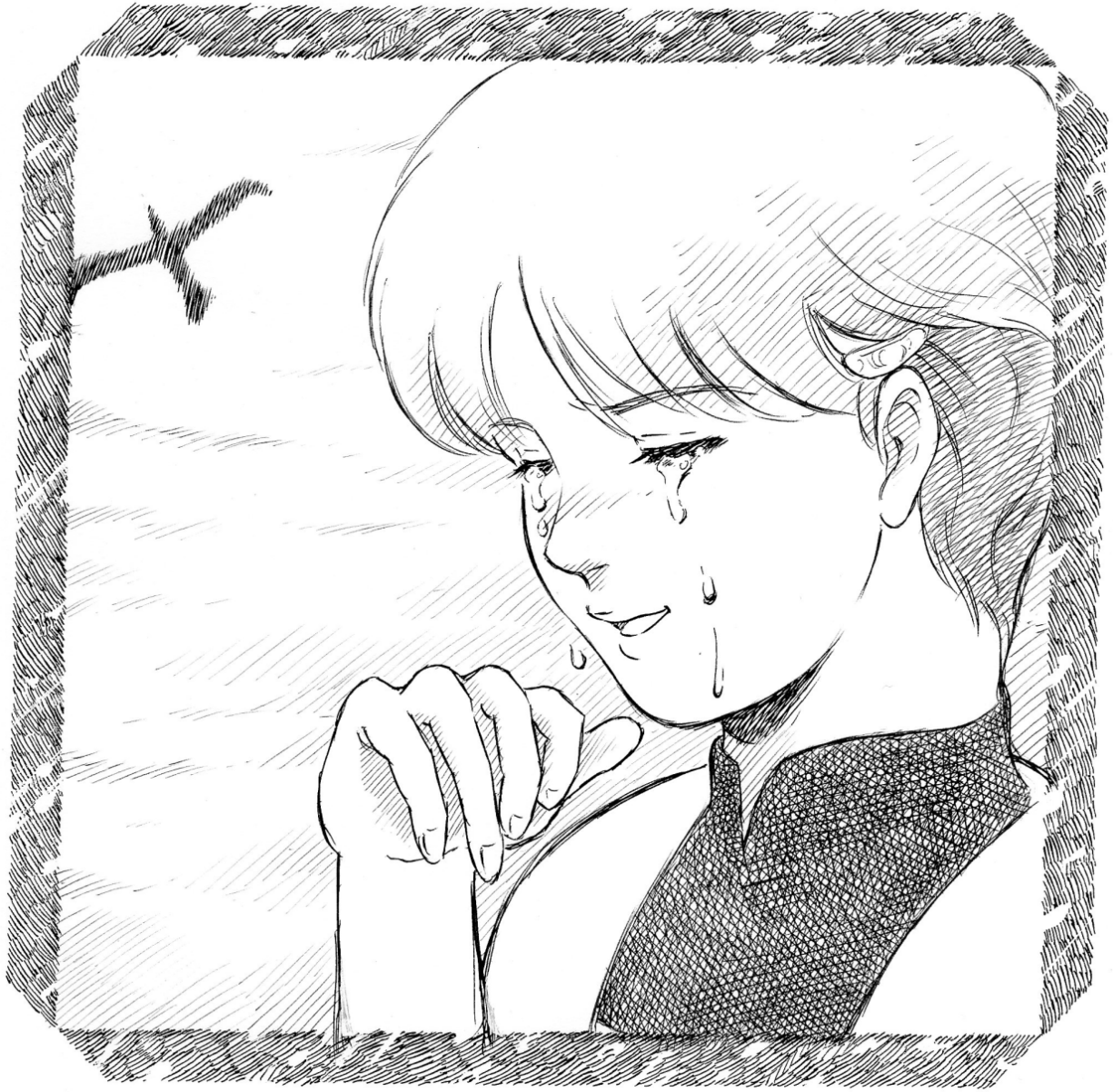
（きれい……巨人たちの体が透明だなんて、私、考えてもみなかった。朝陽を受けても影が出来ないから、まるで彼ら自身が光っているように見えるんだわ）



img054.jpg

そうやってアトラスたちの姿に見とれながらも、チェリアは、ちらと隣に立っているアサジに目をやりました。輝かしい暁光をあびたアサジの横顔たるや、間違いなく離島以前よりも逞しくなっており、痩せて鋭くなった輪郭は、少なからず彼の男らしさを強調しているように感じられます。
（この人が勇者であってくれて、本当によかった）
しかし、チェリアの視線には少しも気づくことなく、アサジはじっとアトラスたちを眺めるばかりです。そのためチェリアも、仕方なげに、視線をアトラスたちの方に戻しました。
その時、彼女の視界の中で、小さな黒影が空を横切っていきました。

アサジも同じものを見たらしく、なぜか嬉しそうに口を開きます。
「ああ、とうとうここまで付いてきたのか」
そう懐かしむように言いますが、チェリアには何のことやら一向に分かりません。これを察したアサジが、黒い飛影を見たままで説明します。
「向こうでなついた鳥なんです」
鳥？　と、チェリアが敏感にその一言を繰り返し、さらにアサジが言葉を続けました。
「北の大陸を離れるとき、私たちに付いてきたのですよ。まさか、ここまで追ってくるとは思いませんでしたけれど」
「じゃあ、いま……テピト・テアナに鳥が飛んでいるのですね」
と横から聞こえる声が、なんだか上ずっているように感じられ、アサジは、覗き確かめるようにチェリアのほうを見ました。すると、そこには大粒の涙を流しながら震える少女の姿がありました。
「どっ、どうしたのですか、チェリアさま」
アサジが慌てて言いましたが、泣いているとはいえ、チェリアの表情に、暗い翳りなどは一片もありません。泣いたままのチェリアが、晴れた声でアサジを宥めました。



img055.jpg

「ううん、違うの。心配なんてしないで。ただ、ちょっと思い出しただけなんですから。さっき、ここまで来るまでのことを……そして私は……鳥が飛ぶことでヘソの緒が、天と人の絆が、再び結ばれたことが嬉しいのです」

チェリアはそうやって泣きながら、絶望のうちに葬った鳥の死骸のこと、そして今まで辿った島の経過についてアサジに話しました。そうして、巨人アトラスたちが島に上陸するまでの時間を二人一緒で待ったのでした。

第5章　青いアトラス

（１）夜明け

この日、昨日までとは全く違った一日が始まりました。長い悪夢の夜も、朝陽によって結局は白んでゆく。そのようにして、輝かしい、この新しい日は始まったのです。

「見てみろ、地面に張りつきながら枯れていた雑草が、今日は風でめくれ上がって、葉先を上に向けている。それに……目の錯覚だろうか。根本のあたりなど、失いかけた命を取り戻したように、若々しい緑色になっているじゃないか」

誰かがそう言うと、ずっと家に閉じこもっていた人々は、窓や戸口から覗いた外の様子が、たしかに昨日までとは違っていることを知り、訝りながらも、恐るおそる屋外へと足を伸ばしました。

彼らの心中では、一様に、奇跡を信じたい気持ちと、期待を裏切られる不安とが交錯しましたが、意を決して表に出ると、とたんに人々から一切の疑念が除かれることになりました。

「間違いない、空からの圧力が消え失せたんだ！」

あれほど必死になって避けた大気に体をさらしても、いまや何の痛みも与えられず、のしかかってくるような重みは、もはや僅かたりともありません。やつれた体に感じられるのは、ただただ清々しい、晴れた朝に香るそよ風だけだったのです。

img056.jpg

そして島人たちは、ラノ・ララク大火山の方角に、信じられない光景を目にします。
太陽の光に満たされた巨大な神像の群がり、そびえる高山を台座にして置かれた彫刻のごときそれは、北の大陸からやってきた三百人のアトラスたちでした。
「あれが、巫女さまが言っていたアトラスなのか……」
空の重圧下にあって、それでも村々を歩いていたチェリア。そのチェリアから話を聞かされていた島民は、この巨人たちが何者であるか、そして何故ここにいるのかを即座に理解することが出来ました。
また、アトラスを招いたチェリアであれば、今という時に、彼らアトラスたちと一緒にいるであろうことも容易に想像がつきました。そのため、まるきり様相が変わってしまった景色を前にして、呆然と立ちつくす誰もが、
「何はさておき巫女の話を聞こうじゃないか。全てはそれからだ」
そう考えました。朝の陽ざしに照らされた人々の足取りは、こうして、何者かに操られるかのように、一糸乱れず、そろってラノ・ララク大火山の方へと向かっていったのでした。

「ラノ・カウ」「ラノ・アロイ」とともに、島の三角形の頂点となる、この「ラノ・ララク山」は確かに火山なのですが、ここ五十年ほどの間、ただの一度も噴火したことがないという休火山でした。若者の中には、このラノ・ララク山が火山だということを知らない者がいるほどです。
そうしたラノ・ララク山に立つチェリアでしたが、そこで目を凝らすと、島中に点在している村々から、人々が自分たちのいる方へと向かってくる姿が見てとれました。
高いところにいれば見通しがよくなるのは当然ですが、今チェリアが立っているのは、山でもそう高くない、ほとんど麓に近い場所でした。普通だったら、一番近くにある村々ぐらいしか見えないはずの高さです。なのに彼女は、
（こんなに高いところから島を見るなんて初めて）
などと、依然としてその場で感心していました。では、どうしてチェリアは、そうした理屈に合わない視野を獲得することが出来たのでしょう。
種を明かすとこうです。すなわち、場所は山麓であっても、チェリアが立っているのは、巨人アトラスの大きな掌の上であったのです。

img057.jpg

ふと見上げると、はるかなる上空で、アトラスの深い眼差しが自分を見守っているのが分かります。チェリアは、笑顔でその眼差しに答えると、今度はラノ・ララク山頂に目を向けました。そこには、一目では数えきれないほどの巨人たちが立ち並び、めいめいが天の底を押し上げている姿がありました。透明な彼らの体が、太陽の光を乱反射させ、その輝きに目がくらみそうです。

チェリアは散乱する光に手をかざしながら、ふたたびラノ・ララク山に集いつつある人々の姿を見守りました。そして、アトラスの掌で膝をつき、

「たくさんの人が来ます。ここに集まるまでに、そうはかからないはずです」

そう、アトラスの足元に立っているアサジに話しかけます。

なにしろチェリアがいるのは、地表から遠く離れた上空なので、そうとう声を張り上げないとアサジにまで言葉が届きません。それでも、どうやらちゃんと聞こえたらしく、アサジが笑って頷くのが見えました。

早朝、海岸でアトラスたちと向かい合ったとき、チェリアの目は、その三百名の先頭に立つ一人に釘付けとなりました。青い、本当に青い巨人。アサジが事前に教えておいてくれた、ただひとり人語を解するというアトラスです。

「こんな色の体があるなんて……」

他のアトラスたちには固有の色がなく、しかも皆、ほぼ透明と言っていい体をしていました。その透明な体をとおして、先にある景色までもが見えます。このため晴天が透けて、その体が青く見えないこともありませんが、先頭の者は明らかに違うのです。

彼の青は、完全に体の色らしく、その青も、空の青というよりは、きれいなサンゴ礁の海を思わせるものでした。それをあえて空の青だとするならば、よっぽど晴れて澄んでいる空の色です。すこしも濁りがないからです。あるいは、サファイアという宝石の青さ、それに似ていると言うべきでしょうか。

そして、彼の深くて澄んだ眼差し、その瞳を目にしたとき、チェリアは、

（何も言う必要はない。何も言わずとも、この人は島を守ってくれる）

と直感しました。はたして実際にもその通りで、青いアトラスはチェリアに向かってニコッと笑うと、前置きもなしに、

「僕らは、どこに行けばいいの？」

と、子供のようなあどけなさで言ってきたのです。そしてさらに、

「出来れば、島で一番高いところに連れて行ってほしい。どうせ天の底を持ち上げるのなら、出来るかぎり上のほうまで押し上げたほうがいいものね。

あと、その場所の近くに、あまり人家がないほうがいいな。僕らの大きい体が、みんなの邪魔になるといけないから」

そう言い添えました。勝手を言って来てもらったというのに、このアトラスという巨人は、島人たちにかかる些細な迷惑までも心配してくれているのです。

「一番高いところ、ですか」
チェリアが呟くようにして言いました。テピト・テアナで最も高いのは、タンガナの開催地でもあった、オロンゴ岬を山麓に擁するラノ・カウ山でしたが、ここは溶岩活動が激しく、ときおり火口から噴煙が吹きだすような危険地域でした。とても、この賓客たちを立たせられるような場所ではありません。
（そうなると浮かぶのが、次に高いラノ・ララク山。あそこなら静かだわ）
と、チェリアはラノ・ララク山に、巨人たちを案内することに決めたのですが、そうして話がついたところで、青いアトラスがゆっくりと腰をかがめ、巫女と勇者の前に、その大きな手を差しだしました。
「僕の手に乗って。二人は道を教えてくれればいいよ」
そう言われて、チェリアは右手に、アサジは左手に乗りました。

青いアトラスが腰を伸ばすと、その掌上にあるチェリアには、地上がはるか遠くに見え、これまでに一度も見たことがない視界が彼女を夢心地にさせました。あらためてアトラスの尋常ならざる大きさに驚嘆しない訳にはまいりません。
「アサジさん、きっとあなたは経験ずみなのでしょうね、こうしてアトラスさんの手に乗るのは。あたしはもう、本当に驚くばかりで……」
「私も驚きましたよ。三か月近くかかってアトラスのところへ行って、事情を話し、こうして彼の手に乗せてもらいました。そして彼らが歩きだしたんですが、そうして島に帰る段になったら、たった三日でついてしまったんです。船も彼らの手で運んでもらいましたが、実に軽々とです。当たり前ですが、歩幅も力も違うのですね」
「じゃあ、三日前までは、アサジさんは北の大陸にいたんですか」
チェリアがそう言って目を丸くすると、そのときアトラスの声が響きました。
「それじゃあ行くよ」
青いアトラスが先頭を切ると一緒に、三百名の巨人たちが一斉に歩きだしました。が、奇妙なことに、彼らの行進は、ほとんど足音というものを立てません。巨人たちの足は、まるで地面を滑っていくかのようであり、その証拠に、この早朝、アトラスたちの足音のために目が覚めたという島人は、誰一人としていなかったのです。

（２）掌上の垂訓

一行がラノ・ララク山に向かっていく途中、青いアトラスの掌上にあるチェリアが、その手の持ち主に尋ねました。

「あの、ほかの方々は、皆さん、ほとんど透明な体をなさってますよね。なのに、どうしてあなただけには、固有の色がついてるんでしょうか」

青いアトラスは、歩調を緩めることなく、ごく何気ない口調で答えました。

「みんな生まれたての頃には、僕みたいに色がついていたはずだよ。みんな同じように、晴れた日の空色がね。だけど、アトラスの一族はね、ずっと天の底を支えているうちに、いつの間にか、体の色を失ってしまうんだ。そして、もっと時間がたつと、色どころか、この体そのものが見えなくなってしまう」

「なくなってしまうの？」

とっさにこう返してくる、どうやら自分たちの体を心配してくれているチェリアに、アトラスは、たおやかな笑顔を見せて言いました。

「なくなりはしないよ。確かにそこにいるんだけど、ただね、触れることも見ることも出来なくなってしまうんだよ。つまり、僕らの体が空そのものになる」

「空に、ですか」

「うん、いまの僕らには、感情も、また個人的な意識もちゃんとある。でも、アトラスの本質は、何も語らずに広がっている、この大空と同じものなんだ。だから、いつかは本来の姿に戻っていく。空に溶けていくんだ」

「そんな、あなたが空に溶けてしまうだなんて、そんなの信じられません」

アトラスは笑顔のままでいますが、チェリアは、それを見ると、かえって悔しいような気持がしてきました。

「だって、ただ消えていくことだけが運命なら、その誕生はあまりに悲しいではありませんか。たとえあなたが空なのだとしても、今は、こうして私と話し合えるほど、明確な意識を持ってらっしゃるのでしょう。その意識は、自分が消えてしまうことを悲しまないというのですか」

チェリアの、自分に対する愛着と悲しみを秘めた言葉に、アトラスは軽く彼女をなだめるような笑みを浮かべながら答えました。

「自分が消えてしまう悲しみだなんて……僕が、その瞬間、消えていく瞬間に感じるのは悲しみなんかじゃないよ。僕らが感じるのは、そう、我を忘れるほどの喜びなんだ。

たしかに僕らは、自分を顧みなくなるごとに、言葉を忘れ、動けることを忘れ、最後には自分が存在していることも忘れてしまう。そして完全に自分のことを忘れてしまった時、僕らは空に溶けいり、空と一体になるんだよ。喜びに包まれながらね」

img058.jpg

「喜びに包まれながら……？」
「そうだよ、チェリア。つまりこういうことなんだ。
人はね、相手を深く想えば想うほど、そのとき自分という存在を忘れていることに気づく。その人は、自分を忘れることで、純粋な想い、純粋な愛となっているんだ。
そこに愛だけがあって自分がいない、そんな場面に人は出会う。そのとき人は、愛のなかに溶け入ってしまっているからだ。うん、だから『いない』んだよ。
そして人を愛するということは、限りない喜び、豊かで温かな喜び。そんな愛という気持ちと一体となった人は、きっとそのとき幸福そのものになっているんだ」
アトラスは平然とこう言いますが、聞いているチェリアの顔に朗らかさはありません。
「そういうことを、実感したことがあるとは言いづらいですけど……ええ、言葉としては分かります。愛に溶けて自分がなくなることは、幸せだと言っているんですね。決して分からない訳ではありません。
けれども、あなたは自分が『空に』溶けていくのだとおっしゃいました。空は、愛と同じではありませんでしょう」
「そんなことはないよ。空だって愛だよ。なぜなら、この世界そのものが、天界から、かの生き物に贈られた愛そのものだからだ。そう、空も、海も、風もね。
だから、この世界のなかで自分を忘れていられるのなら、それだって愛そのものという事じゃないかな。
そしてチェリア、世界が愛なら、愛とはやはり喜びそのものだよ。だからこそ、オンパロスが、空を、つまり世界の一部を吸い込むとき、僕たちはそれが苦しいし、悲しいんだ。失って悲しいのは、それが喜びであったことの証拠だもの」
「空も愛、愛は喜び……そこに溶けていくことは幸せ……」
「うん」

「じゃあ、空になったあなたは、いつでも喜んで私たちを見ているの？」
アトラスが頷くと、それまで眉間に皺をよせていたチェリアも、
「ごめんなさい、何も知らずに失礼なことばかり言ってしまって。無くなるのではないんですものね。悲しむことなんてないんですよね」
そう言いつつ、口もとにやっと笑みらしいものを戻しました。
「私……正直に言うと、自分たちが今、こうして平和を満喫しているのを、とても申し訳なく思ってたんです。自分たちが引き起こした災厄だというのに、そこから逃れるために、関係のないあなた方に来ていただいたこと、それを、とても心苦しく感じていました。あなた方の来着を望むのと同じぐらい、また後ろめたくもあったのです。
でも違うのですよね。私たちが幸せでいられるのは、あなた方にとっても、決して不快なことではないのですよね。あなた方が、愛を注ぐことに喜びを感じるのなら」
アトラスは無言で、ただチェリアの顔を見つめるばかりでした。
巨人の瞳は、エメラルドのような緑色です。まったく濁りがないせいか、彼が思っていること全てが、この瞳に映し出されているかのようにさえ感じられます。

そして、その瞳が、いまは「君の言うとおりだよ」と語っているようで、そのためにチェリアは、心の底から安心して、彼の大きな手に、我が身を委ねることが出来たのでした。
青いアトラスは、そのままラノ・ララク山への道を確実に進んでいきましたが、しばらくすると、またもや右の掌からチェリアの声が聞こえてきました。
「どうしてあなたの体にだけ、色がついているのか、まだ教えてもらってません」
え？　と、アトラスも、肝心なことを忘れていた自分に可笑しみを感じたらしく、チェリアとともに、声を出して笑ってしまいました。
「ん、僕は下界に、つまりこの世界に降りてきてから、それほど月日が経っていないんだよ。だから、まだ空に溶けきるまでには時間がかかるんだ」
アトラスがそう答えた、ちょうどその時、一行は、自分たちがすでにラノ・ララク山を目前にしていたことに気づくのでした。

こうした経緯があって、とうとう一行はラノ・ララク山に到着した訳ですが、到着したとたん、その山頂を中心にして、巨人たちが整然と布陣。青いアトラスを除いて、皆すぐさま天の底に向かって手を伸ばしました。
その青いアトラスは、一人だけ山のふもとに立ち、アサジのことは地面に降ろしたものの、チェリアのほうは掌に乗せたままで、村が密集している内陸部のほうへと、その顔を向けていました。
そうしてからアトラスは、地面へ降ろしたアサジが、彼の足元でちゃんと立っているかを見守っていました。やはりアサジが負っている怪我のことが心配なのでしょう。

そうこうしている間にも、島民たちは続々とラノ・ララク山の周りに群がってきます。
いつしか集まってきた人々は数百を数えるまでになり、チェリアにとっても、そろそろ話をし始めてもよい頃合いであると思われました。そう思ってアサジに視線を送ると、この意図を看取した勇者が、体いっぱいの大声で叫びます。
「これより巫女がお話をされる。みな、しかとその言葉を拝聴せよ。一言たりとも聞き逃してはならない」
鋼のように鋭いアサジの声に、集まった誰もが緊張し、その切迫した視線が一斉にチェリアの方へと注がれました。すなわち、はるか高みにあるアトラスの手の上にです。もっとも、人々に声を届かせるため、その巨大な手は、大体腹部のあたりまでは降ろされていましたが。

img059.jpg

一陣の風が吹きわたり、人々の目には、チェリアの髪がフワッと風に揺れなびくのが見えました。着衣からのぞく白い肌がまぶしく、見上げていると、まるでチェリアが巨人たちを従えている女神のようにも感じられます。

その女神の口から、いよいよ持ち前の澄んだ声が紡ぎだされました。

「こうしてアトラスさんたちの前に集まっている以上、皆さんの中には、軒先に訪れた私の話を聞いた方が大勢いらっしゃると思います。そんなあなた方は、これまでの惨事、苦しみの原因がどこにあったのか、今さら教えられるまでもなく、理解しておられることでしょう。

しかし、このラノ・ララク山には、私の訴えにたいして、全く聞く耳を持たなかった者たち、あるいは、私が何かを訴えていた事自体を知らなかった者たちもいるようです。

迷わずこの場所に集まってきた人たちの後ろを、なかば不審がりながら追随してきた者たち、それがどういう素性の者たちであるかを口にすることは、今はいたしません。

けれども、あなた方が、これまでの惨事の原因について何も知らないということは……悲しいことですが、きっと間違いのないことなのでしょうね。

ここには、そうした二種類の人たちがいらっしゃる訳ですが、逆に、私が話すべきことは一つしかありません。それは何も知らずにいた人にとっては驚嘆すべきことですが、以前に聞いたという人にとっては、同じことの繰り返しになるかもしれません。

しかしながら、以前に聞いたという人も、再度耳にする私の話を、いま一度じっくりと味わってほしいと思います。言葉は、たとえ同じ内容であっても、それを聞く状況によって、人に訴える強さを格段に変えるものだからです。

であるならば、この巨人たちを前にしているあなた方は、以前とは比べ物にならないほど、私の話を深く理解することが出来るでしょう。私はそう信じてやみません」

こう前置きすると、チェリアは幾分か厳しい顔で、あたりを見回してから本題に入りました。

その話は、太古、天と地しかなかった世界に、空の種がまかれ、それによって今のような環境が出来あがったこと。その空の種が、デルフィー中毒者たちの悪念によって膨張、ラノ・アロイ山ほどにも巨大化してしまった現状説明へと続きます。そして、急場をしのぐため、勇者がアトラスたちを連れてきたという報せによって一区切りしました。

「たしかに、こんなにも幸福を感じさせる朝はありません。

ですが、みなさん勘違いはしないでください。アトラスさんたちが支えているこの空が、昨日までと違うものになったなどとは決して考えないでください。

たしかにアトラスさんたちの力によって、島には素晴らしい平和がもたらされました。これまでの苦しみが嘘のように思われる平和がです。

ですが、もし彼らが島を去ったとしたら、残された私たちはどうなるでしょう。

その結果は明らかです。私たちは、天の底がただちに地上に落ちてくるのを見ることになるのです。みんな死んでしまうのです。それが現実です。我々を取りまく危険には、いまも何ら変わるところはないのです」

聴衆たちは青ざめ、不安がざわめきを煽ります。しかし、そのざわめきも、巫女の峻険な声によって、それ以上に盛り上がるのを絶たれました。

「では、私たちはどうすればいいのでしょう。今、何をすればいいのでしょう。基盤のない、砂上の楼閣のような平穏さを与えられただけの今。本物の平和を手にするための猶予を与えられただけの今。そんな今、私たちは、何をすればいいのでしょう。

答えは一つです。私たち島民の汚れた心が、このように陰惨な事件を引き起こしたならば、まずはそれを正していくしかありません。

そうです。すべての島人たちを同胞であると信じて、他人の心を自分の心だと思って、共にその心を正していくしかありません。天の底とオンパロスをもとに戻すには、この島を、以前の姿に還すしかないのです。もとの美しい姿に還すしかないのです。

ここに集まってくださった皆さん全員に厳命します。どうか以前の、明朗で純真な心を取り戻してください。あるいは取り戻させてください。

私の願いはそれだけです。私たちの目標はそれだけです。そして、島民全員が生き残るための手立てはそれだけなのです」

（３）新しい日を迎えて

島民たちは、みな巫女の言葉に圧倒されていました。一言一言に真実があり、有無を言わせぬ説得力が迫ってくるからです。とても十四歳の少女の言葉とは信じられず、あらためて知る巫女の血の偉大さが、彼らの胸を熱くさせました。

この日、巫女チェリアの魂からの訴えが、人々の心を変えつつあったのです。

チェリアも言っていたとおり、このラノ・ララク山には、失踪していたデルフィー中毒者たちも姿を見せていましたが、そうした者たちまでが、

「キンナラは、巫女の呪いによって空が重くなったと言っていた。だが巫女が、こんな人が俺たちを呪ったりするものか」

と、わずかな矛盾もなく、これまでの事情を説明するチェリアに接することで、自分たちがしてきた事に疑念を抱くだけの冷静さを取り戻しました。

長期にわたって苦しみ続けながら、今日という日に最上の喜びを味わえた人々は、その背後にあった摂理を解き明かしてくれる巫女の言葉を、心から噛みしめずにはいられなかったのです。

中には泣いている人もいます。嬉しさの涙であり、悔いの涙でもありました。

アトラスの掌から降りたチェリアは、集まった人々の顔を改めて見渡しました。そこには、深い悔悟

の色を浮かべつつも、自分の過ちを受け入れることによって、次第に清澄になっていくという表情の変化が見られます。

「私が悪かったのです。まるで問題の部外者のような態度をとり、人にばかり責任を押し付けていたのですから。私は、何もしないという悪行によって、自分が天の底を地上に近づけていたことを自覚せずにいたのです」

これは女性が、涙ながらにチェリアに言ってきたことですが、つぎに挙げるのは、なんと、あるデルフィー中毒者の言葉です。

「私はキンナラという老婆のもとで暮らしてきた者です。薬も飲みましたし、狂いもしましたが、時々まともな意識が戻ることがあるのです。

ちょうど今がそういう時期にあたっておりまして、それだから、ここに来ることも出来たんです。もちろん、ここに来られないほど狂ってしまった者たちも大勢いるわけで、そいつらは、今も薬を飲みつづけているのでしょうが……

それにしても、巫女さまの話を聞いて、自分がしてきたことが空恐ろしくなりました。そして、どれほど私が愚かしくとも、自分の快楽のために、同胞である島民たちの命を奪うような真似をし続けるのは御免だと思いました。これからもとの家に戻り、そこで妻たちの言葉に耳を傾けることから、自分の立て直しを図りたいと思います」

他にもたくさんの人たちがチェリアに話しかけ、あるいは彼女のまえで自らの罪を告白しました。多くの人たちにとってこの日は、自分たちが新しく生まれ変わるための、始発の時となったのでしょう。

（本当によかった。これならテピト・テアナを復興できるかもしれない）

チェリアは、そう思って目をつむりました。

そして、自分の言葉によって、彼らが真っ当な生き方に目覚めてくれたのかと思うと、僅かなりとも巫女としての義務を果たせたような気がして、その分だけ、ほんのりとした幸せが身を包むのを感じるのでした。

しかし、そろそろ民の足も帰宅の途につき始めたらしく、ラノ・ララク山から、ゆっくりとではありますが、次第に人影が減っていきました。チェリアの話が終わった時点では、誰一人として動こうとしなかった聴衆たちでしたが、それでも正午を回らないまでに、ほとんどの人たちがこの地を去っていきました。

「ねえ、あれ、もっと見てたいんだよ」

「あれとか言わないの。もう、しつこいんだから。家に帰っても見られるでしょう。何て言っても、あんなに大きいんだから。私たちを助けに来てくれた方々を、そんなにジロジロと見てたら失礼だと思わないの？　ほら、皆いなくなっちゃったんだから、私たちも帰らなきゃ」

と、そんな他愛のない親子の会話が、一番最後に聞こえた島民の声でした。

こうして人々がいなくなったのを確かめると、チェリアも、とりあえず一度砦に戻ろうと思い、アサジを帰路に伴うつもりで彼に近づいていきました。

いかにも軽やかな足どりでアサジに近づいていったのですが、このときチェリアは何かしら生臭いも

のを感じました。
（これ、もしかして……）
十歩ほど先にいるアサジは、一応は直立しているものの、その立っている姿に生気が感じらせません。伸びた髪からかすかに覗く顔は、ほとんど蒼白に近いもののようにも見えます。
そして、生臭いと思ったものが、彼から漂う血の匂いだと分かると、驚いたチェリアは、短い距離を、それでも必死に駆けてアサジに近づいていきました。
しかし、アサジは踏みしめられるチェリアの足音に合わせるように、崩れ落ちるようにして体を地面に近づけていきました。

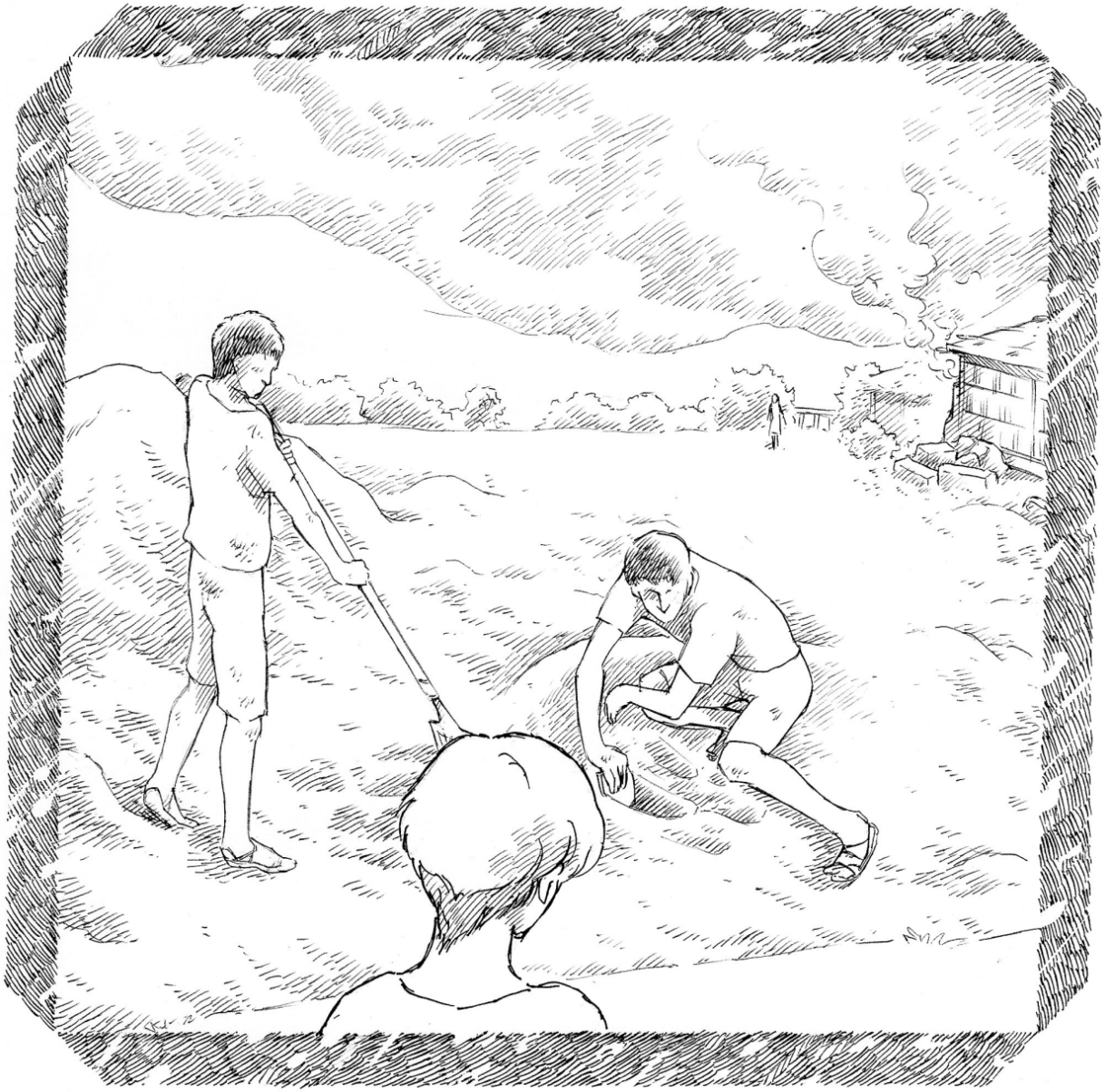
「アッ、アサジさん！　アサジさん！」
チェリアがアサジを支えると、その脇腹に巻かれていた白い包帯が、いまは鮮血でびっしょりと染められているのが分かります。アサジは、顔を冬の満月のように白くさせながら、それでも無理に微笑んで言いました。
「そんな大声を上げるほどの怪我ではないんですよ。痛みはしましたが、もう治りかけていたのです。ただ、さきほど調子にのって大声を張り上げてしまって……塞がりかけた傷口が一気に開いてしまったようです。
せっかくの喜ばしい日ですからね、私としても何とか最後まで、持ちこたえようと思っていたのですけれども、これじゃあ情けないですよね。守るべき巫女に、そのような顔をさせてしまうとは……」

img060.jpg

そう気丈に言いましたが、その先を続けることはできません。
巫女の柔らかな膝に、それまで何とか保っていた緊張を吸い取られるようにして、勇者アサジの意識は失われていきました。
「アサジさん、あなた、何てことを……でも良かった。血脈に衰えはない」
チェリアは、集まっていた砦の人間にアサジを担がせ、ただちに医者のもとへ連れていくことを命じました。

島には以前の平穏さが戻りつつありました。
空の圧力さえ無くなってしまえば、あたり一面は、まさに春の盛りのころ。いたる場所から新緑の草むらが萌え出してくる様子は、まるで充溢した土の力が、これまで自分を押さえつけていた苦悩の壁を、一気に突き破るかのようで感動的でした。
これまでの事がありますから、島人たちには、なおのこと周囲が美しく感じられもしましょう。村のあちこちから家屋修繕にともなう物音が響き、またその合間には、朗らかな笑い声が絶えることなく響きわたりました。
人々の暮らしぶりも、元通りの堅実さを取り戻しており、荒れてしまった畑には、整地にいそしむ男たちの姿が。いい匂いを立てる厨房には、かいがいしい働きを見せる女たちの姿が見られました。この新生の春、テピト・テアナには、芳しい島の美しさを謳歌する、限りない喜びの歌が溢れていたと言えるでしょう。

img061.jpg



何でもないながら澄んだ輝きにみちた光景、男たちが耕し、女たちが家を守る光景は、軽やかな足どりで村を巡っているチェリアにも、胸温まる一時を与えていました。
「あの日から間もないのに、島の様子は驚くほど変わってる。だって、今も別世界を歩いてるような気持ちなんだもの。
久しぶりにラノ・アロイ山のほうに行くけど、この分だったら、オンパロスだって、申し訳なさそうに身を縮めているに違いない。そうなっていて当然だわ。だって、この島の美しさが、オンパロスを実際に見るまえに、目にすべき結論をちゃんと出しているんだもの」
人々の悪念によって膨張する不気味な種とはいえ、島の様子がこうも健全なものになってしまえば、オンパロスがもつ伸縮性は、もはや問題解決の進行をはかる目盛りも同然。小さくなればなるほど、それだけ島の復興が確実に近づいていることになる。チェリアには、そのように思われました。
「でも……ここから見ると、オンパロスに変化は感じられない……いえ、小さくなっているとしても、それが僅かなものだったら、ここからでは、まだ遠くて見えないものね。もっと近づいたら何か分かるかもしれない」
村のひとつを通り過ぎながら、チェリアがひとり言いました。
そうして、やがてラノ・アロイ山の麓から、真横に聳えるオンパロスを眺めることになったのですが、それほど間近で見たのにも関わらず、それでもオンパロスに変わったところは見受けられません。
「小さくなってない……けど、ええ、予想とは違ってしまったけど、あれから、まだそう日が経ってないんだもの。結果が出るまでには、やはり時間がかかるんだわ。あんなに幸せそうな村々の様子だもの、少しもすれば、きっといい結果が見られるはずだわ」
しかし、そう言うチェリアの唇には、否もうとしても、どうしても表れてしまう無念さが宿っていました。

（４）混乱

チェリアは、その後もオンパロスの観察を続けていましたが、いくら経ってもオンパロスが縮小しているという事実を認めることは出来ませんでした。
（どういうこと？　だって……）
オンパロスの性質上、人々の心がよい方向に向かっていけば、膨らんだのとは逆に、必ず小さくなっていくはずですし、ましてや、ラノ・ララク山で話をしてから、もう三週間が過ぎているのです。島の雰囲気が、和やかこの上もないことを見てきたチェリアにしてみれば、いまだにオンパロスが小さくなろうとしていない事のほうが不思議でした。

ですが、それ以上に驚いたのは、ここ数日間のことですが、その僅かな間に、なんとオンパロスが再び大きくなっていたのです。
大きくなったと言っても、それはごくごく小さな変化でしかなく、アトラスたちが来る前の、あの猛烈な膨張を起こしていた時とは比べ物になりません。
しかし、それでも、この事態はチェリアを落胆させるには充分なものがありました。オンパロスが大きくなっているということは、それは取りも直さず、この期に及んでも、いまだ悪念を発しながら生活している者が、島のなかに多数いることを意味しているからです。

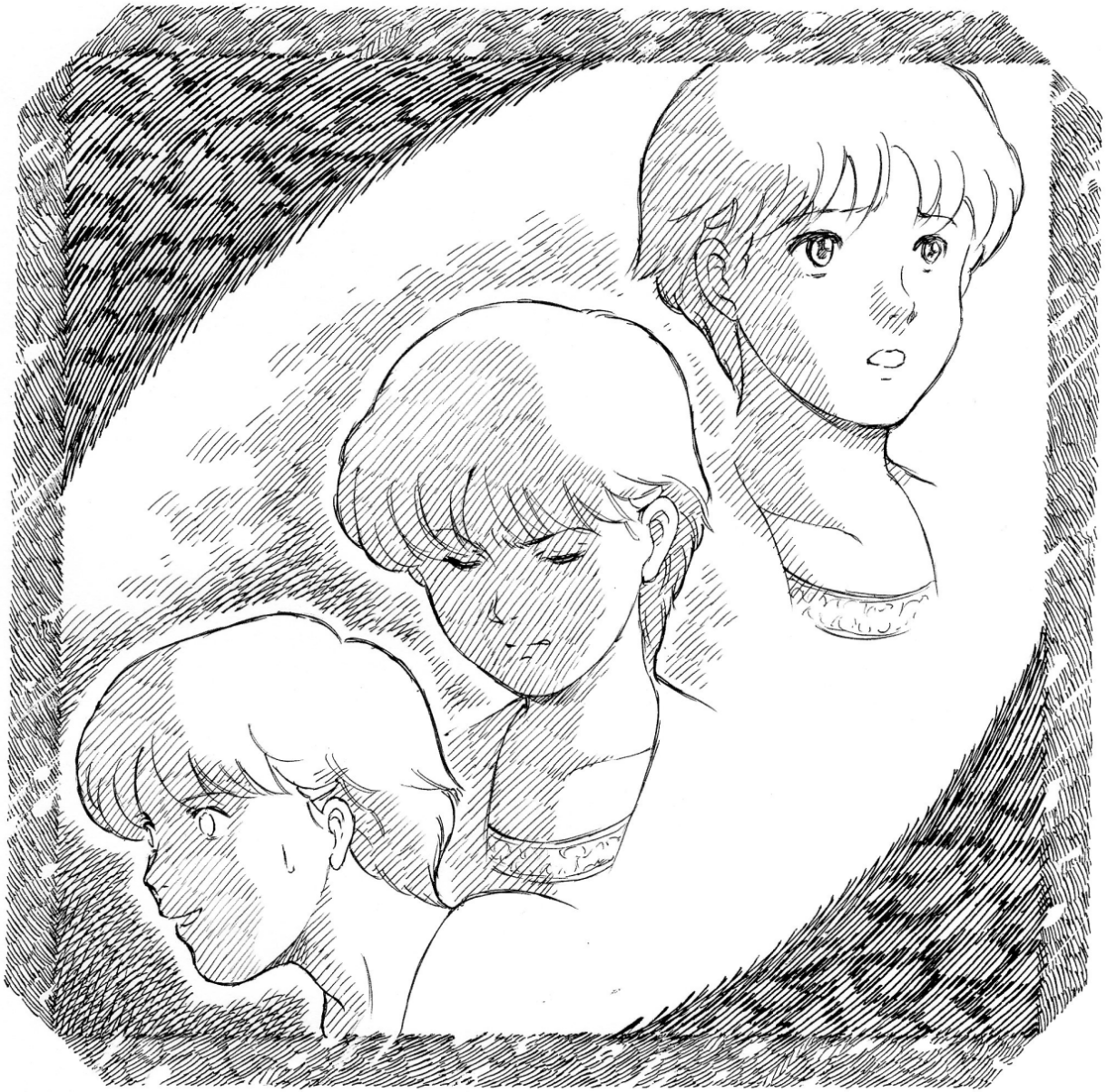
「たしかに、いまも見つかっていないデルフィー中毒者たちは大勢いる。それは分かってる。
でも、彼らだってあの日、私の話を聞いたはず。少なくとも、仲間から私の話を伝え聞いたはず。そうなるように、私はあえて、ラノ・ララク山で中毒者を勾留することをしなかったのだから。
なのに、それでも彼らには、自分たちがしている事の意味が分からないというの？　自分たちが島を滅ぼそうとしていることが分からないというの？」
連日の観察によって、オンパロスの膨張が、目の錯覚などではあり得ないと悟ったとき、チェリアは胸から沸き上がってくる、溶岩のような憤りを抑えることが出来ませんでした。
「アサジさんは、あんな深い傷を負ってまで、アトラスさんたちを連れてきてくれた。命に別状がなかったからいいものの、本当に大変な目に遭われたはずだわ。
アトラスさんたち自身だって、本来携わるべき自分の役目を投げ出してまで、このテピト・テアナに来てくださった。どれほど感謝してもし足りないことだし、その分、私たちには彼らの好意に応える義務がある。
それが一日でも早く正しい心を取り戻すことだろうし、そのことは、あの日に、島人たちに伝えられたつもりでいた。そうして伝わった証が、皆の涙であり、罪の告白なのだと思っていた」
チェリアはオンパロスを睨みつけました。
「なのに……結果はこのとおり。オンパロスは大きくなり、島の滅亡は、遠ざかるどころか、逆に近づいている。馬鹿みたい、ふふ……あの島民たちの涙は何だったのかしら。
あの涙は何だったの？　これまでの過ちを悔い、そうして新たに生まれ変わることへの宣誓ではなかったの？」
身の危険もいとわずに自分の願いを叶えてくれたアサジ、そして無私の極みにまで優しいアトラスの顔を思い浮かべれば、そうするほどに募る、
（私という人間は、なんという不義理を犯してしまったことか。私が至らないせいで、あの優しい人たちの労苦を、すべて水泡に帰してしまった）
という虚脱と自責にまみれた申し訳ない気持ち。また、自分の精一杯の訴えが、少しも人々の心に伝わらなかった惨めさ。そして、体中を掻きむしりたい程のもどかしさが、オンパロスを前にしたチェリアから、次第に冷静さを失わせていきました、
「いえ、もしかしたら、単に私が思い上がっていたのかもしれない」と。

「だって、落ち着いて考えてみれば、私のような子供に、たった十四歳の娘に、おこがましくも、人の心を変えることなんて出来るはずがないもの。

私には、天の底を支えることも、助けを求めて海を渡ることも出来なかった。そう、何ひとつ意味のあることを、人の助けになることを成しえなかった。こんな人間がしゃしゃり出て、私にも何か出来ることがある、そんなことを思ったのが間違いの始まりだったんだわ。そうよ、そうなんだわ」

チェリアの心は、異様な変貌を遂げつつありました。

投げやりな気持ちが底なしに無責任な人格を生みだし、その分だけ、大きな力を持った者への依存心ばかりが肥大していきました。そして、その依存心は、あの偉大なる巨人、青いアトラスに向けられていったのです。



img062.jpg

「島のことはアトラスさんに任せるべきだわ。彼は力も知恵も持った方なんだし、力量ある者が島を治めることには、彼も心からの賛意を示してくれるに違いない。力量ある者が統治者となれば民は幸せになるのだし、それに彼は言ったのだもの。人の幸せは自分の幸せでもあるって。
民たちの幸せがそこにしかないのなら、彼だって、私の願いを退けたりはしないはずだわ」
そう言いながら、チェリアの足はラノ・ララク山の方角に向かっていき、その歩みはやがて疾駆となりました。彼女は、体を侵食するような不安の勢いに負け、その不安から逃れるようにして、アトラスのもとへと走っていったのです。

春も終わりの頃とあって、ここラノ・ララク山の緑も、遠からず訪れる薄灰色の雨季を前に、最高の繁茂を現そうというのか、まるで躍起になって原色の花や若草を伸ばしている観があります。まさに一面の緑であり、テピト・テアナにおける草木の美しさは、まさにここに極まったかのようです。
青いアトラスは、上空からそうした山の緑を眺めつつ、なかば放心しているような態でもって天の底を支えていました。
「きれいだな……すごくきれいな島だ、ここは」
そうした満たされた気分で天の底を支えていたのですが、焦点の定まらない視界に、何やら必死に動くものを見いだしたとき、アトラスの顔には、喜びと疑念が同時に表れるような、そうした、いつになく複雑な表情が浮かびました。
（チェリアが来てくれた……けれど……）
と、山裾の一角から近づいてくる愛らしい少女の姿が見えたのですが、その少女の顔が、今日に限って、妙に沈痛な陰りを帯びているのに戸惑ったのです。チェリアに会えるのは嬉しいことでしたが、こんな顔を見せられては、疑念を持たない訳にもいきません。

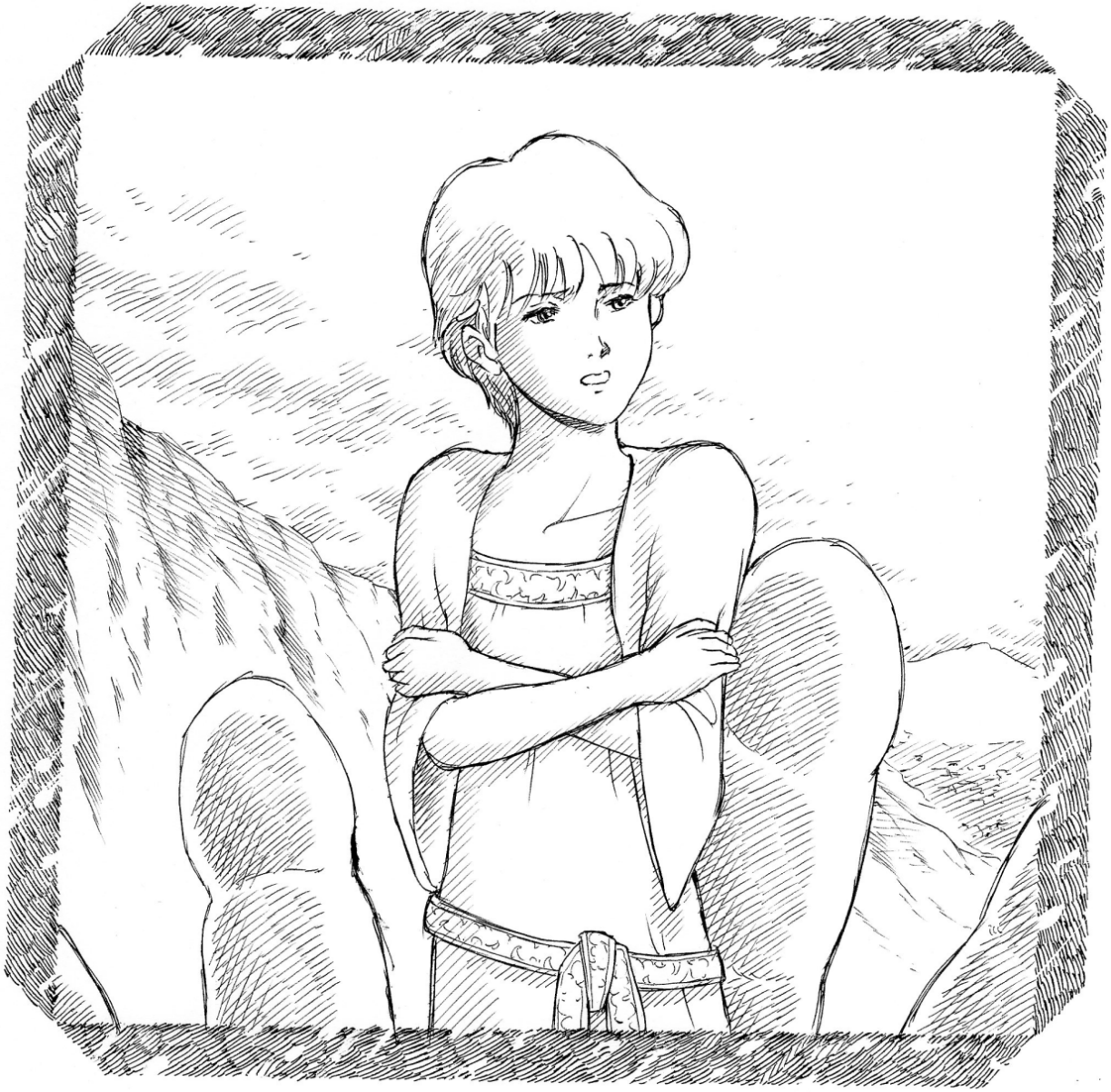
そうした異質な雰囲気に包まれたチェリアでしたが、荒い呼吸で青いアトラスの前に立つが早いか、まるで何かに怯えているかのように、一息つく間もなく、まくし立てました。
「アトラスさん、どうか助けてください。これより私は一般の島民として生きますから、あなたが巫女に代わって島の統治を受け持ってください。お願いします」
早口でこう言うチェリアに普段の落ちつきは微塵もなく、その意図がどこにあるのかも、アトラスにはさっぱり見当がつきません。彼には、この別人のようなチェリアの前で何を言ってやればいいのか分からず、とりあえずは面と向かって話ができるよう、少女に向かって大きな手を差し伸べるばかりでした。
「チェリア、何だか今日はおかしいよ。どうしたっていうの？」
首を傾げながらも、邪推のかけらもないアトラスの言葉は、このようなチェリアをしてさえ、わずかに気持ちを落ち着かせるのに効を奏しました。
「……今日もオンパロスを見に行ってきました。まだハッキリとしなかったので話しませんでしたが、数日前からオンパロスが再び膨らんでいるように感じられて、今日、その真偽を確かめに行ったんです。不安はありましたけど、島人たちの明るい暮らしぶりを馳せ思い、オンパロスの膨張など、きっと錯覚に

過ぎないだろうと信じていたんです」

「……」

「でも今日オンパロスを見にいって……本当は見るのが怖かったんですけど、あの日、あなたの掌で真実を訴えた自分を信じて、この目でオンパロスの膨張を確かめてみました。

そして、そうして確かめてみたら……錯覚などではなかったのだと、その事だけが明らかになりました。オンパロスは実際に、僅かながら膨らんでいたのです」



img063.jpg

いかなる表情も浮かべられない巨人の前で、チェリアの言葉が続けられました。彼女の顔は、やがて震えさえ見せはじめます。

「これを見ることによって、どんなに誠心誠意で訴えたところで、島民たちに私の気持ちが伝わることはない、そういう結論にたどり着くことができました。あの朝にしても、私の話など誰も聞いてはいなかったのだと、それが身に沁みて分かったのです。

でも、それも仕方ありません……だって、私はなんの力もない者なのですから。そんな人間の話では、民たちに聞き入る気が起こらなくても当然でしょう」

（なるほど、それでここに来たというわけか）

「無力な私に、民たちを導くことなんて出来ません。だからアトラスさん、心からお願います。私の代わりに島の統治者になってください。あなたの偉大な力によって、この島の人々を確実に善導していってもらいたいのです」

このように話すチェリアは、その話すごとに、背負っていた重荷から解き放たれるかのように、次第にすっきりとした顔つきとなっていきました。ですが、その話を聞いているアトラスの方は、彼女の話が進めば進むほど、その表情に険しさを増していくばかりです。そして、

「アトラスさん、どうか私という無力な女を憐れみ、その神にも等しい力によって、島を正しく統治することを約束してください」

と巫女が言うのに対する巨人の返答たるや、傍で会話を聞いている者があれば、きっとチェリアが気の毒に思われるほど、刺々しくて厳しいものでした。

「イヤだ！　僕は天の底を支えるので手一杯さ。その上そんな無力な女の肩代わりをするなんてウンザリだね。冗談じゃない、フン」

「え、え？」

チェリアは、この思いもよらなかった言葉に度肝を抜かれました。よもや、あのアトラスが、と耳を疑わずにはいられないほどの冷たさであり、悩み苦しむ少女にとっては、まさに泣き面に蜂といった感じです。これでは大声だって出さずにはいられないでしょう。

「そんな！　人の幸せを望むというあなたが、打ちひしがれ、自信を失った私を、こんなにも非情に扱うなんて。あなたは偽善者だわ！」

チェリアは巨人の掌上でうつ伏し、拗ねた子供のようにボロボロと涙を流しました。そうやって泣きながら、なおもアトラスの冷淡さをなじります。

「あなたが本当に優しい方なのだとしたら、私は、その優しさを頂く資格もない、そんなにもつまらない者なんですね。私の深刻な苦しみも……あなたにとっては何でもないぐらい些細なことなんですね。こんな私なんて、あなたにとっては、きっと塵に等しい存在なんですね！」

すげないアトラスにつめよるその言葉も、余裕のない無様な泣きじゃっくりのために、鬼気迫るものを失って、途切れ途切れになってしまいます。

このようなチェリアを、青いアトラスは、その放った言葉とは裏腹な憐れみと慰めの眼差しで見つめ、しばらくの間を置いてから、温かな声で話しかけました。

（５）まぶたの中の出会い

「チェリア、君には、僕が完全無欠の巨人に見えるんだろうね。何の悩みも欠点もない、そういう、いかにも超人的なものに。だけどね、君には信じられないかもしれないけど、僕は、チェリアと、まったく同じ悩みに苦しんだことがあるんだ」

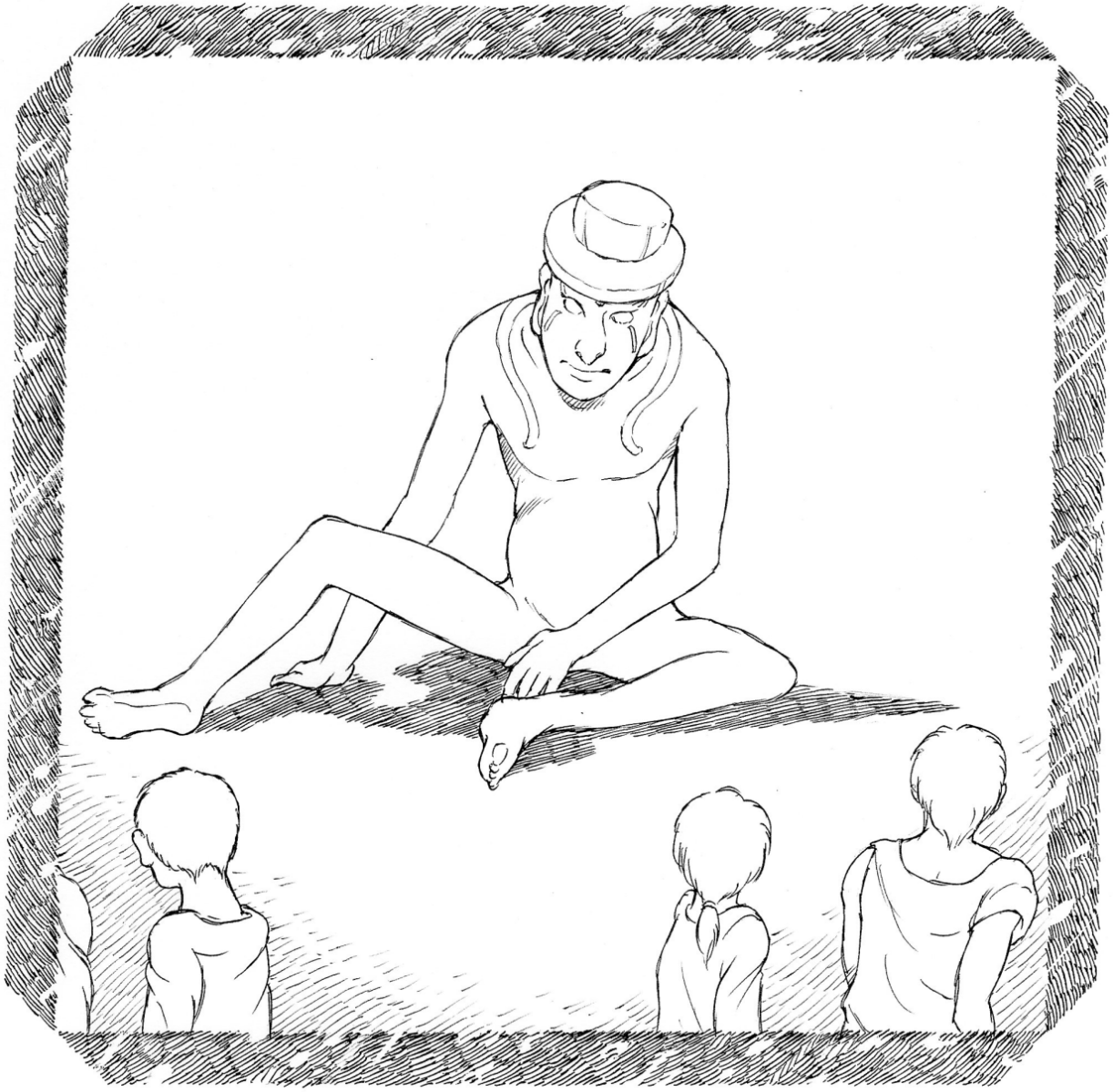
こう言うと、アトラスは、それまで掌上のチェリアに向けていた顔を上げ、はるか遠くのほうを眺めて言いました。

「僕は、この世界に、つまり下界に来てからそれほど経ってないって、前にそう言ったことがあったよね」

先ほどからチェリアはうつ伏していましたが、泣きながら、おそらくはアトラスの話を聞いています。

「それまで僕は天上界で暮らしていた。暮らしていたと言っても、実際には『ふと気づけば、独りでそこにいた』という事なんだけどね。つまり僕は、自分がいつ生まれたのかも、誰から生まれたのかも知らないんだよ。

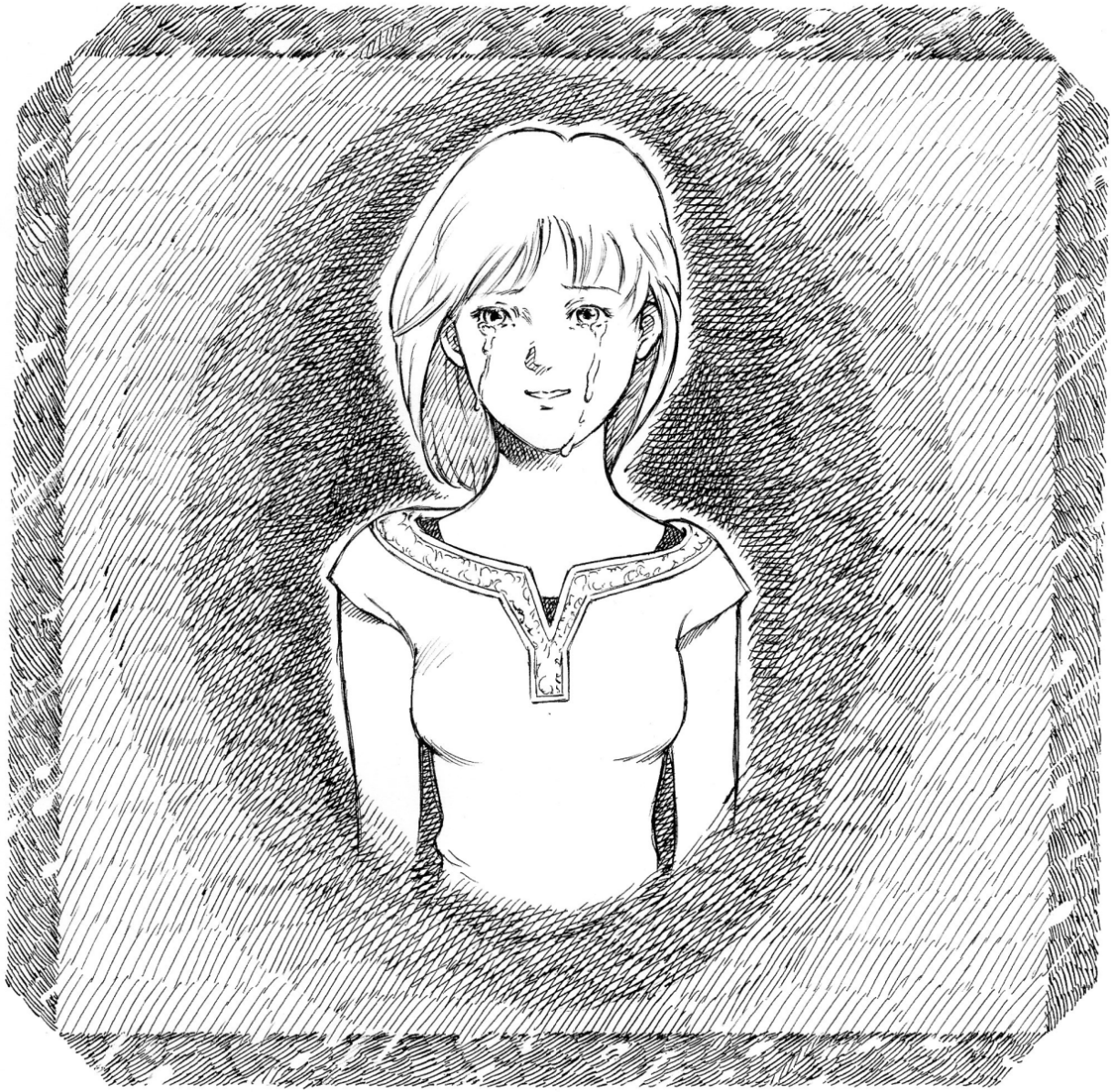
何も分からないから赤ん坊と一緒だけど、でも、いきなり孤独に追いやられた赤ん坊なんて想像できるかい？　そこにいて自分が何をすればいいか分からない。誰も僕を守ってくれない。それに加えて、こんなに大きな体をしているのは僕だけで、同じ姿をした仲間なんて誰一人としていないんだよ」



img064.jpg

「似た人がいないものだから、周りの人たちに溶け込めなくてね、僕は結局いつも一人でいじけてた。何をしていいか分からないから、僕には何も出来やしないって。
そんな自分を……情けないと思ったことはないな。ただ理不尽さを嘆くばかりで。
だから、何も教えてくれない神さまを恨んだりもしたよ。天上界にいれば、そこに全知全能の神さまがいるってことだけは分かるから、
『全知なんだから、神さまは僕の苦しみも知っているはずだ。なのに神さまは、こんな僕のことを可哀そうに思わないのか』ってね」
その言葉に、チェリアの体が僅かに震えました。……でありながら、あなたは自分を可哀そうに思わないのか、とは、先ほど自分がアトラスに訴えていた文言の形式そのものであり、
「そんな僕は、いつまで経っても一人だった。いつも自分のことが可哀そうだった。無力な自分を、誰かが助けに来てくれることだけを願ってた」
という、その後に続けられた青いアトラスの言葉は、チェリアにとって、まさに今、自分の胸中にある思いそのものであったからです。

アトラスの言葉が続けられます。
「そういう日が続いたんだけど、ある日、僕の身に不思議なことが起こったんだ。どうしてあんな事が起こったんだろう、そう今でも思い返すことがあるよ。本当になんの前触れもなく、それは起こったんだ」
「何が……」と、チェリアが思わず口を開きました。
「うん、それは、ただ何気なく目をつぶろうとした時だった。
そのとき……僕の目を覆ったまぶたの裏側に、つまり閉じられた目の暗がりの中に、突然、見も知らない女の人の姿が映ったんだ。
会ったことも話したこともない女の人、だったよ。でも、一目見ただけで、その人が誰かの母親で、そして僕にとってすごく大事な人だということが分かった。
そして、遠くに見えるその人を、ね、目を凝らすようにしてよく見ると、その人が泣いているのが分かった。彼女はなぜか泣いてたんだ。
『どうして泣いてるのさ？　　ねえ、泣かないでよ』



img065.jpg

僕がそう言わずにはいられなかったぐらい……その女の人の涙は、なんて悲しげだっただろう。だから僕は彼女の涙を止めてやりたくてね、そのために彼女に近づこうとしたんだ。けど、そうして足を踏み出したとき、彼女が不意に笑った。涙を流しているままの顔で、僕に笑いかけたんだ。

笑ったといっても、べつに喜んでいた訳じゃない。

『仕方ないことだもの、そんな事しなくていいよ』

って、そう言ってるような、諦めなさいって僕を諌めてるような笑いだった。だけど僕は、それを見たら余計に悲しくなって、余計に彼女を助けたくなった。それだから、思いっきり手を伸ばしたんだけど……その瞬間に、まぶたの女の人は消えてしまったんだ」

「しばらくは呆然としてたよ。

そして落ちつきを取り戻したとき、僕は、彼女の涙を止められなかった自分が、本気で憎らしくなった。どうして彼女を助けてやれなかったのか、と、そう何度も自分を責めた。ただまぶたの裏に映っただけの、ほんの短い時間まみえただけの女の人だったけど、とても彼女が空想の産物だとは思えなかったんだ。

そして、ねえチェリア、僕たち人間は……大切な人のことを想うとき、その人が悲しんでいたとしたら、その面前でジッとなどしてられるものだろうか。

僕は、自分が可哀そうだと思っていた時には、ほんとうに何も出来なくて、ただただ神さまを恨むばかりだった。けれど彼女のことを思うと……僕には、どうしても自分の体を動かさずにいることが出来なかったんだ。

僕は何も考えられなかったけど、とにかく方々を歩いたよ。彼女を探し出すことを、見つけた彼女の悲しみを癒すことだけを願って。

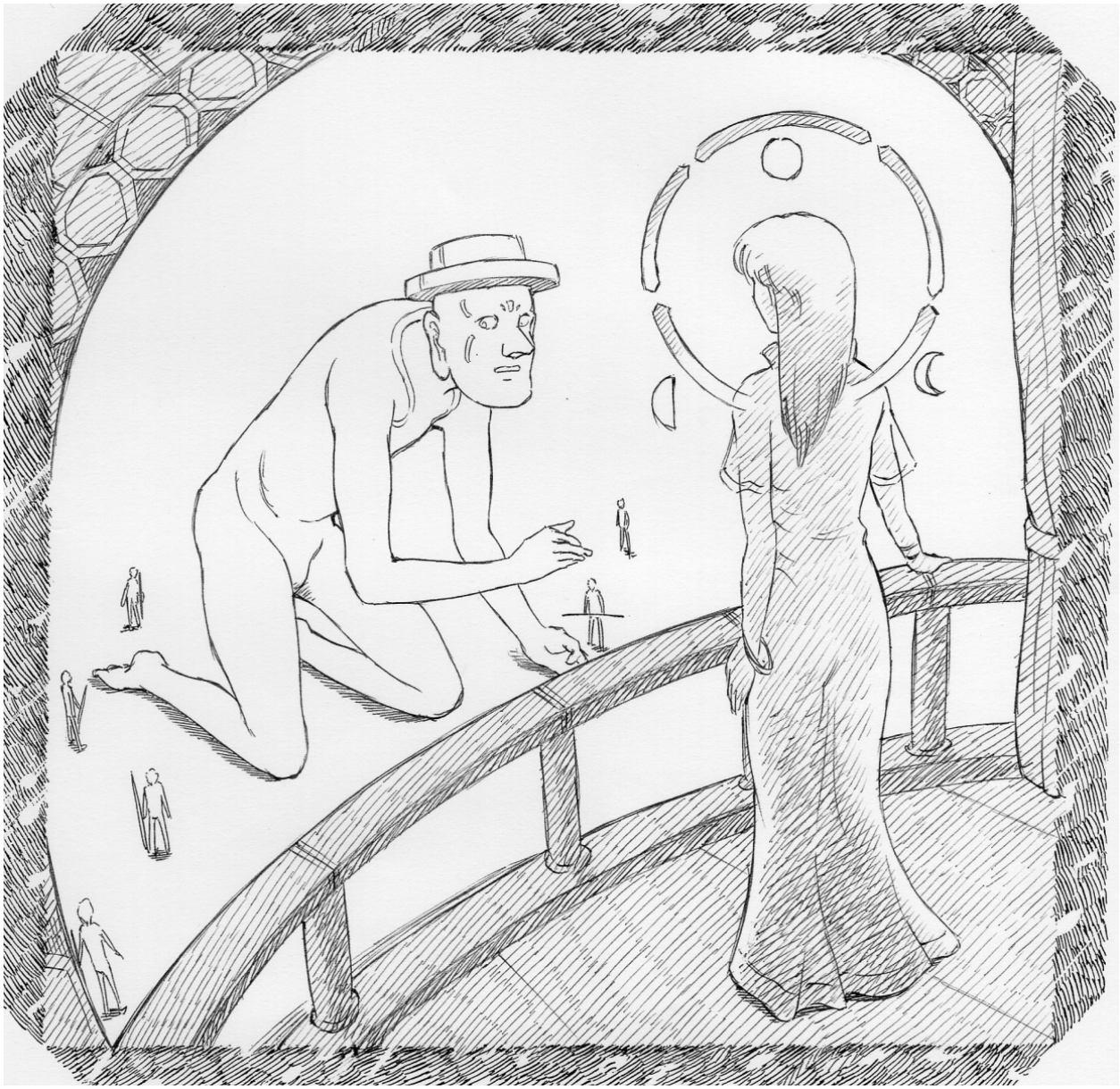
そんな僕のことは、天上界でも、大きな話題というか、大きな噂になった。何も見ていないような目で、でも一心不乱になって何かを探して歩く巨人の姿は、さすがにね。

そのために、僕は連れていかれるようにして、見知らぬ宮殿へと足を踏み入れた。実際には、天使たちが、僕を要注意人物として、天上界でも偉いとされる方のもとへ連行していったんだ」

チェリアが、涙の乾かないままに、おずとアトラスに尋ねました。

「天上界の偉い方とは、つまり神さまを指しているのでしょうか」

「いや、違う。天地創造の神さまは名前を持っていないけれど、その方は名前を持っていたからね。彼女は、その名前を月神セレネといった。月の女神さまだよ」



img066.jpg

「でも、この時の僕にとっては、そんな事どうでもよかった。とにかく、あの女の人に会いたくて、そして彼女を助けてあげたかったんだ。なのに……そのことを尋ねたら、月の女神であるセレネさまは、少し悲しそうな表情を浮かべて、

『残念ですが、天上、地上、どの世界を探してみても、そのような女性はおりません』

と言った。僕はすぐには信じられず、また信じようもしなかったけど、それを言ったのが、とても嘘をつくような人には見えなかったからね、観念して、仕方なくその言葉を受け入れたんだ。そうですか、分かりました、とね。

そうして肩を落として帰ろうとしたんだけど、このとき僕の背中に向かって、セレネさまがこう言ったんだ。

『誰かを助けようとしたあなたが、一体どこへ行こうというのです。また一人で悩み、いたずらに無駄な毎日を重ねようというのですか。目当ての女性はいませんが、その女性と同じように、あなたの助けを求めたがっている者は、いくらでもいるのですよ。

私はあなたに仕事を命じたいと思うのですが、その仕事を引き受けてくださるでしょうか。それは、下界に降り立ち、そこで天の底を支えることなのですが。

下界のいくつかの場所では、天の底が自然と低くなって、そこに住んでいる人々を圧迫して苦しめている現状があります。だから誰かが天の底を支えなければならないのです。私の望みを聞いてくれるのであれば、あなたの大きな体によって、その不遇の人々を、天の底による苦しみから解放してやってほしいのです』

僕はそれを聞いて喜んだよ。まぶたの裏側に映った女性、彼女を見つけられなかったのは残念だったけど、その代わりに自分の役割が見つかったんだ。しかも、嫌いだった、この大きな体が役に立つという。劣等感がそのままプラスの要素に置き換わったようで、本当に嬉しいったらなかったよ」

「ううん、嬉しいのはそれだけじゃなかった。まばゆい光線に導かれて下界に降りてみるとね、驚いたことに、そこには僕より先に天の底を支えていた人たちがいたんだ。それも、僕とそっくりな姿をしてね。そう、ここにいる仲間たちだよ。ここにいる大勢のアトラスたちが僕を迎えてくれたんだ。

彼らはすでに話をする術を忘れていたけど、心の声によって、自分たちが何者であるかを教えてくれた。そして、新しい仲間の登場だといって、僕がそこに現れたことを心から祝ってくれたんだ。

それから百年ぐらい経ったかな。いつの間にか、僕が助けたいと思うのは、あの女性だけではなくなっていた。僕の足元で生活している人々を見ているうち、その多くの人々の幸せをも願うようになっていたんだ」

ここまで話すと、アトラスはそれまで遠くを眺めていた視線を、やっと掌のチェリアのほうへと戻しました。涙のあとを頬にのこすチェリアは、今では真剣さとあどけなさを合わせたような顔をしています。また、その顔には、明らかに落ちつきを取り戻したのが分かる、静謐な瞳が添えられていました。

アトラスは、安らかな微笑みをたたえると、再び澄んだ言葉を編んでいきました。

「分っただろう、チェリア。僕にも、君と同じように無力な時があったという事がさ。

でも、どんなに無力な者でも、どうしても、自ら体を動かさずにはいられなくなる時がある。チェリア、それが、どんな時だか分かるかい？

それはね、自分よりも大切に思える誰かのために生きるときだよ。自分よりも、その存在を大切に感じられる誰か、そういう誰かのために生きるときだよ。

なぜなら、誰かのために生きようとすると、胸の内側からどんどん力が湧いてくるからさ。そしてチェリア、その力で精一杯のことをするとね、自分でも信じられない力が、さらにどんどん心から溢れてくるんだよ。際限なく透明な力が湧いてくる。

この力を何て言うか知っているかい？　この力を『愛』っていうんだ。だから、その力は人を愛していれば分かる。その力は人を愛していれば感じられる。

反対に、愛を忘れた者は、その忘れ方がひどくなるほど自分が可愛くなって、そして、そうして自分が可愛くなるほどに無力になっていく。一人でいじけていた僕のように。僕に頼ってきた今のチェリアのように。

だから、ねえ、チェリア、このことばかりは確かめておきたいんだ。君は今、島の人たちを愛しているのかい？　自分の無力さを嘆く君よ、君は今、島の人たちを自分以上に大切なものと思っているかい？」

チェリアは、アトラスの言葉によって、自分の暗い胸中が、まるで虫干しでもされるかのように、無理やり押し広げられるのを感じました。そして、それが人間にとって、どんなに辛いものであるかは言うまでもありません。

（私が島民を愛していた、そんな事がありえようか。私が嘆くべきなのは、自分の無力さなどではなく、自分可愛さに囚われてしまった、その指導者にあるまじき卑賤さに対してなんだわ）

と、その辛い自己認識を、チェリアはしかし、あえて虚心で受けとめました。

なぜなら、目の前にアトラスという、やはり自分可愛さのなかで苦しみ、その後に愛の力を手に入れた「人生の先輩」がいたからです。同じ悩みを共有した者が傍にいる、その状況が、人に素直さと活力を与えてくれるのです。そのためチェリアは、

「私は逃げていただけなのですね」

と言って笑い、あくまで島の指導者である「巫女」として、それまで投げ出そうとしていたものを、もう一度しっかと背負わんとする決意を固めました。

こうしたチェリアの様子は、駆けてここに来た時と比べれば、段違いの落ちつきを見せています。しかし、いまだ彼女の頬に残る涙の跡は、アトラスをして、なおも心に悔いを残さずにはいられませんでした。

「今日は、さんざん君を泣かせてしまったね。君が大切だからこそ厳しくしたのだけれど、結局、つらい思いをした君を、さらに苛めてしまった、ごめんね」

「そんな、とんでもない！」

「でも、もう涙を流すことなんかないんだ。落ち着いて周りを見てみれば、その目には、君を無償で助けようとする人たちの姿が、たくさん映るだろうから。

つまり君は一人ではないんだ。力仕事の人手が欲しいのなら僕らを呼べばいいし、それに君には、誰よりもまずアサジがいる。うん、本当にそうだよ。チェリアが呼ぶんだったらアサジは、それが何の理由であっても、また、たとえ彼自身がどんな病気や怪我を負っていたとしても、きっとすぐ君のもとに駆けつけるだろう」

「そうかもしれませんね、彼はとても責任感が強い方ですからね」

「そうじゃないよ、チェリア。ねえ、人を愛することは大事だけれど、自分が愛されているのを知るのは、もしかしたら、それ以上に大切な事かもしれない。

だから、よくアサジのことを思い出してみて。彼は心から君を愛していて、愛する君を悲しませたくないと思ったからこそ、北の大陸とテピト・テアナを往復するなんて奇跡を実現できたんだよ。彼は、それほどにも君を大切に思ってるんだ」

「そんな、言いすぎですよ……それはきっと」

と言いつつも、アサジと海路を共にしたアトラスの言葉を嘘とも思えず、チェリアは突然のことに、大いに赤面せずにはいられませんでした。

「そして僕もね。君が自分の責任を投げ出すためではなく、その責任を果たすために僕を必要とするのなら、僕は、いつだって君の願いに耳を貸すんだよ。だって僕は、君が大好きなんだもの、ね」

img067.jpg

そうアトラスが言うと、チェリアは明るく輝いた笑顔を彼に見せ、それをアトラスに対する答えとしたようでした。

アトラスもまた、もはや何も言おうとはせず、チェリアを地上に返すことにも躊躇いありませんでした。チェリアは速やかに掌から降ろされ、なごり惜しそうに青いアトラスを眺めながら村へと歩いていきます。

そして、そうやってラノ・ララク山を後にしたチェリアが、アトラスの目のなかで小さくなった頃、予期せず、雨がポツポツと降ってきました。

アトラスⅢ

著　者　　正道

制　作　　Puboo
発行所　　デザインエッグ株式会社